
空白の魔法

武者小路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空白の魔法

【Zコード】

Z4533M

【作者名】

武者小路

【あらすじ】

無事に高校入学を果たした柏木正一。かじわぎじょういち

しかし、人見知りな性格が災いし、入学5日目にして友人は0。そんな正一の前に異世界への扉が開く。

扉を抜け、たどり着いた世界で正一は自らの体の異変に気付く。

0・記憶の未来

俺がいることで世界が、そこに暮らす人達が苦しんでいても、それは俺のせいじゃない。

俺がいなくなる事で世界が平和になつても、自らが感じることのできない幸せなんて何の意味もない。

自分がいなくなつてしまつ以上、後世に幸せを残してあげるのもいいかもしないけれど、感じられない幸せよりはしっかりと感じられる不幸せの方が、今の俺にとっては嬉しいのだ。

まあ、つまりは

「……死にたくないんだよなあ」

呟く言葉は闇に呑まれるだけ。

俺は結局、最後まで抗うしかないのだ。

死にたくなければ殺すだけ。

他の解決方法がある事も、痛い程にわかつてゐるけれど、相手が聞く耳を持たない以上、どうしようもない。

「よく頑張ったほうだよな……」

小さな声で愚痴をこぼすが、それで敵が止まる筈もなく、意識を集中させ、一度瞳を閉じる。

世界から切り離されたような、そんな錯覚に陥りながらも、ゆっくりと、確かに瞼を持ち上げた。

田の前にま、数千の兵士が迫っていた。

1・異界の扉

ゲームの様な世界。

つまりは誰もが想像する様な、剣と魔法の世界に俺だつて興味がないわけではない。

行つてみたいと思つた事だつてあるし、布団の中でそんな妄想をして、枕に顔をうずめた事だつてある。

だけど、いくら空想の世界にのめり込んだといひで、実際にそこに行ける訳ではない。

夢から覚めれば、辛い現実が田の前に転がつているのだ。

もはや恒例となつてしまつた様に、退屈な授業を聞き流しながら、そんな考えを巡らせる。

昨日やつたゲームのせいだらうか。

確かにあの世界は「じゅりょうも随分と魅力的だつた様に思つ。

「おい、柏木。余所見するな」

「……はー」

窓の向こうに広がる空を眺めながら、視線を動かさずに答える。注意をした数学教師は俺の態度に不満がある様だつたが、呆れた様にため息を吐くと、直ぐに授業を再開した。

少し悪いことをしたな。

どう考えたつてこの状況、俺が悪いに決まつてゐるのに。

幸い今は六時限目、あと少しごらじ真面目に授業を受けてもいいだるつ。

教師の態度を見て、少しばかり改心した俺は窓から田線をそらし、前方の黒板を見つめた。

だが、人の人生はやる気を出したときにはもう手遅れだったり、その有り余るやる気をそぐ出来事が起ころる様にできているのだ。今回も例に漏れず、そのようである。

「……はい、今田はここまで

無情にも鳴り響く終業のチャイム。

とは言つてみたものの、内心は別にそこまでがっかりはしていない。やる気を出したのだって、単なる気まぐれなのだから。

ぼーっと数学教師を見ていると、入れ違いに担任の教師が入ってくる。

すると、生徒の帰りたいオーラを感じ取ったのか、必要最低限の連絡をしだだけで、担任は早々にホームルームを終了させた。それは俺にとっても嬉しいことではあったけれど、友人と呼べる人がいない者にとっては帰りの道すら苦痛なのである。

寂しく帰り支度を整える俺に、話しかける人はいない。
かといって、自分から話しかける勇気など持ち合わせていない俺は自然と、一人で帰るしかないのである。

荷物をまとめた鞄を背負い、教室を後にする。

廊下では皆、勉強という呪縛から解き放たれ、級友、もしくは恋人との放課後を存分に満喫している。

それはもちろん、俺にとっては羨ましい光景であり、同時に異世界のように遠いものでもあった。

そんな騒々しさの中で階段を下り、一階の下駄箱へとたどり着く。

上履きから履き替えるために、履きなれた運動靴を取り出す。いつも通りの行動。

登校時と下校時に靴を履き替える瞬間、俺はいつも確かめる。靴の中、画鋲が入っていないか。靴の裏、ガムが張り付いていないか。

今時、そんな古典的なことをする奴がいるのかはわからないけれど、俺にとってのいじめとはこれなのである。

かといって俺は今までの人生において、いじめられたことは一度もない。

じゃあ、なぜこんなにも警戒しているのかといつて、俺は今、いついじめられてもおかしくない状況だ。

そつ思つてゐるからである。

今日もそういう理由から、運動靴の中をゆづくじと眺めた。異常なし　とはいかなかつた。

「なんだこれ……？」

入っていたのは一枚の紙。

小さく折りたたまれたそれは、なんとも可愛らしい薄桃色をしていた。

いじめではないことは確かだ、むしろこれは

『ラブレター』

頭の中に浮かんだのは何ともうれしい、そんな言葉だった。自然と綻ぶ口元を押さえ込みながら、ゆっくりと紙を広げる。だが、そこに書かれていたのは期待していたようなものではなかつ

た。

『できるだけ人目につかないとこに行つてください。早くー。』

お世辞にも綺麗とは言えないような字で、書き殴られたそんな内容。

告白のための呼び出し、と取れなくもないけれどそれは少し無理がある。

第一、呼び出しだとしたら場所が曖昧すぎる。

それに最後の一文。

そこから滲み出る必死さが、少しばかりの恐怖を煽つた。

無視するべきなのか、それとも従うべきなのか。

普段の僕ならば、絶対に従うことなどせず、くしゃくしゃにして三箱に投げつけるだらう。

だけど、今の僕の心境としては従つておきたいといつのが本音だった。

その理由は自分でも計り知ることができない。

だけど言つ通りにしなければ何か大変なことが起つてしまつ、そんな胸騒ぎがして止まないのだ。

もう結論は出た。

だとしたら、急がなくてはならないだらう。

運動靴をしつかりと履き、先ほどの紙をブレザーへと放り込む。

俺は人目につかない、適当な場所を求め、走り出していた。

十分ほど走つただろうか。

たどり着いたのは駅前の入り組んだ路地裏。

駅前の広場は今日も相変わらず人でごった返していたが、少し道をそれるだけで、人はぱつたりといなくなる。

しかしそれで、この後どうしたらいいのか？

「いやいや、まさか本当に来るのはね。恋文に偽装したのが効いたのかな？」

突如聞こえた背後からの声。

急いで振り向くと、そこには目を疑う様な人物が佇んでいた。
いや、それを人物と形容していいのかはわからない。

何せそれは牛のような顔に角、尻尾、そして大きな翼、とても現実とは思えないようなものが盛りだくさんに装備されていたからだ。

「そりゃあ固まるよなあ。俺みたいに高貴で邪悪な生物、この世界にはいないもんなあ？」

そう、邪悪。

その一言で表すことができる、漆黒の翼をはためかせながら謎の生物は俺を嘲笑つた。

「悪魔、とでも言つておいつか」
「な、なんだよ……お前……？」

俺の問いに悪魔は即答する。

その薄ら笑いはこの世のものとは思えないほどに、邪悪で恐ろしか

つた。

膝が震え、まともに歩けないまま後ずさる」としかできない。

「まあ俺もさ、今日は失敗したくないんだよ。だから早く終わらせよひせい?」

一步一歩、悪魔が近づく。

その度に膝の震えが増し、ついには後ずさることすらできなくなっていた。

腕をつかまれる。

死人のような冷ややかさに、俺の恐怖は限界へと達する。

そして悪魔がつぶやく謎の言葉が、子守唄のように俺の眠気を誘つた。

「あばよ

最後に視界に移ったのは悪魔の邪悪な笑みだった。

2・野獸の洗礼

夢を見ていた、といつていい訳でもない。

ただ真っ暗な空間を当てもなく、流されるままに漂つてこよう。それを夢と言つてしまえばそれまでだけれど、どうもそうとは思えなかつた。

もつと邪悪な、まるで魔術に弄ばれているような……

魔魔？

そつだ、あの魔魔に出会つて……

そして、どうなつたんだ？

揺らぐ意識の中での自問自答。

答えが出るよりも先に、田の前が光に包まれた。

遠慮も何もなく、瞳へと降り注ぐ木漏れ日。

風にたなびく深緑の葉。

田の前にはそんな景色が広がつていた。

ゆっくりと上体を起こすと、首元を何かがくすぐる。

慌てて後ろを振り返るが、そこには緑の大地が続くばかりだつた。

恐る恐る首元に手を当てる。

すると、柔らかい糸のようなものが指へと絡まつた。糸を絡めたまま、それを田視できる位置まで持つてくれる。

髪の毛……？

吹き抜ける風に揺れる濃い栗色の糸。

それはどこからどう見ても、人間の髪の毛だった。

首元まであるその髪の毛は当然の「」とく、俺の頭から生えている。だけど、おかしい。俺は髪の毛は長いほうではなかつたし、色も純粹な黒だった。

「…………」

違和感を感じ、つぶやく言葉。

だけどその言葉自体が、どうしようもなく違和感の塊だった。以前までの声変わりを経験した低い声ではなく、可愛らしい少女のよつな、とても愛らしい声色。

それが、俺の声帯から発せられているのだ。

幻聴だとか、そういう言い訳を許さないほどに、どうしようもない現実感を持つて耳へと届く。

絶対に自分の声、そう認識せざるを得なかつた。

「なんなんだよ、一体……」

だるそうな少女の声を聞き、苛立ちから頭を搔くが、その手触りさえ俺を現実へと引き戻す。

とても異常な災難が降りかかっているのは確か、なら今の状況を把握するのが、真っ先にやるべきことだろつ。

ゆつくりと片足を持ち上げて、大地を踏みしめる。

体重をかけた右足は以前のものより一回り以上細く、どうにも頼りなかつた。

そんな足を見て、より一層高まる不安を感じながら、立ち上がる。比較対象がないながらも、分かつてしまつほどに身長が縮んでい

た。

冷静さを失いそうな頭を振るい、自分の外見を隅々まで確かめる。先程まで気付かなかつたのが不思議なくらいだが、俺は悪魔に会つたときのブレザーポーズではなく、白いローブのようなものを着用していた。

丈は膝の少し下辺りまであり、そこから下には細い色白の肌が覗いている。

腕のほうは手首まで長さがあり、頭の後ろにはフードが付いていた。

まるで魔法使いだな。

そう思いながら、無意識に両わき腹のポケットに手を突っ込む。辺りを眺めていた視線を再び自分の体に戻すと、あることに気が付いた。

ゆつたりとしたローブに隠された胸の辺り。

そこは男だった時とあまり変わらず、特別膨らんでいたところではない。

「……セーフ」

一言呟き安堵するが、まだ安心というわけではない。自分が今置かれている状況の確認、やりたくはないけれど、やらなくてはどうしようもないことだ。

そんな思いから恐る恐る、ゆつくりと血の手を下腹部へと持つていいく。

ロープの上からでも分かるように、そこにあるはずのものはすっかり消失してしまっていた。

「嘘だ、嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ……」

自分に言い聞かせるように呟きながら、意味もなく辺りをうねりうねする。

嘘だ。これが現実のはずがない。

あの変な悪魔に会った辺り、いや、今朝からの出来事は全て夢だったのだ。

そつとでも言わなければ、説明が付かない。

だけれど、吹き付ける風、降り注ぐ日差しは確かに現実のものだった。

一体これはどうしたことなのか。

俺は女、それも多分少女になってしまったようだ。

性転換なんてそんな……

「漫画じゃ……あるまい……」

驚愕を口にしながら、背後から聞いた鳴き声に振り向く。獣のような声を上げるのはやはり獣。

血走った目で涎をたらす、漆黒の狼がたたずんでいた。

一触即発。そんな言葉の通り、今にも飛びかかってきそうな前傾姿勢を維持し、こちらを睨む。

今まで見たことがないような、いや狼は見たことがないけれど、それでも大きな体躯に足がすくんで動けない。

悪魔のときと同じく、我ながら情けないものである。

今回は相手が明確な殺意を抱いているからこそ、一刻も早く逃げなくてはならないのに。

恐怖で震えながらも、狼の隙を探す。

すると突然、狼の頭部を小さな石が捉えた。

「早く逃げなさいー！」

声がした方向を向くと、金色の長い髪をした女性が石を投げようとしていた。

呆然とした様子で俺がそれを眺めていると、女性は大声で逃げるよう促す。

その声に我に返り、踵を返し走り出すが狼は女性に気を取られこちらを追つてはこない。

安心しながら前方を向くが、再び背後から女性の声が聞こえた。

「気をつけて！ 後ろよー！」

走る速度を保つたまま、恐る恐ると首を捻る。

そこには案の定、猛スピードで走る狼が迫っていた。

生い茂る草や立ち塞がる木の間を抜け、できる限りの速度で走り続ける。

しかし、一足歩行の人間が狼のスピードに敵うはずもなく、距離はどんどんと縮まっていく。

もう駄目だとあきらめかけた瞬間、足がもつれ前方へと倒れこんだ。生い茂る草がクッショニになり、衝撃は少ない。

けれど本当の脅威はすぐ後ろまで迫っていた。

唸るような鳴き声が聞こえ、振り返ると、今まさに狼が飛びかかる瞬間。

その後方には走りくる女性が見えたが、どう頑張っても間に合ひはない

しないだろう。

今度こそ本当にもう駄目だ。

俺は恐怖でまぶたを閉じた。

それからすぐに、右腕へと激痛が走った。

どうせに差し出した右腕は格好の餌食。

痛みに悶えながら口を開くと、鋭い牙がしつかりと食い込んでいた。

まるで自分のものではないような、それほどまでに痛烈な悲鳴が鼓膜へと突き刺さる。

腕に噛み付く狼の向こうで先ほどの女性が青ざめた顔をしていた。その光景を最後に俺の意識は薄れしていく。

「……んなん……ぱっかりだな……」

意識は途切れだ。

3・仮面の視線

ゆっくりと意識を取り戻すにつれて、思い出したかのように右腕の痛みが強くなる。

刺すような痛みに顔をゆがめながらも、いつの間にやら寝ていたベッドから上体を起こすと、そこは見たこともない小さな部屋だった。死んでいなかつたところとは喜ばしいことだけれど、一体ここはどこなのだろう。

と、そんな疑問を持つた途端に、何やらたくさんの方の視線を受けていることに気付く。

その発信源はどうやら俺の足元のほうであった。

「目が覚めた？ 気分はどう？」

一人の女性の問いに、その周りが騒がしくなる。女性の後ろにはたくさんの人たちが立つており、興味津々といった具合にこちらを眺めていた。

「あの、えーっと」

何とも突然の出来事に混乱し、口ごもる。

そんな俺の状態を察したのか、女性は背後の人だかりを部屋の外へと押し出していった。

後に残つたのは立派なひげを蓄え、杖をついた老人と、腰に剣を携えた屈強そうな男だけであつた。程なくして老人が口を開く。

「傷は痛むかい？ お嬢ちゃん」

「えっと……はい、少し

やつぱり俺は性転換してしまっているのだと、落胆する。
一方で俺の返答に満足したのか、老人は優しげに微笑んだ。

「そうかい。まだ動かすことはできんじやうが、回復魔法をかけたから安心なさい」

老人の言葉から察するに、この傷の治療をしてくれたのはこの人たちなのだろう。

だけど、回復魔法？ なんだそれは。
まるでファンタジーのような、そんな単語について問おうと思つた
その時、老人の隣にたたずんでいた男が口を開いた。

「それで？ 魔法使いの嬢ちゃん。名前はなんていう？ ビニから
来たんだ？」

またしても、聞き慣れない言葉。

確かに俺は今、魔法使いのようなローブを身に纏つてているけれど、
いくらなんでもそれだけで本物の魔法使いだと思う人などいないで
ある。

再び黙りこくる俺を男は怪訝そうな顔で眺める。

「どうした？」

「あー、えっとですね。名前ですか？　えーっと……」

正直に話してもいいが、鈍感な俺でも気付くほどに、この世界は俺がいた所とは違う場所なのだと思う。

無駄に混乱を招く必要はないかもしない。

だけれどこの問い、どうやって切り抜けたものだろ？

「自分の名前ぐらい分かるだろ？」

沈黙する俺に苛つきを隠せない男は回答を急かす。

だけれど、正解と思われる答えが、俺の口から出る」とはなかった。

「まあまあ。まだ病み上がりじゃらん。そう急かすでない」

老人が制止すると、男はばつが悪そうに部屋を出て行つた。
別に出て行くことはないだろうに、ずいぶんと纖細な人だ。
男の背中を見送り、閉まる扉を眺めていると、老人が口を開く。

「すまんのう。今はゆっくりと休むことが肝心じゃ。今日はここに泊まつていいくと良い」

そう言い残すと老人も部屋を出て行つてしまつた。

聞きたいことも聞けずに、嵐のように去つていった人たちを思い出す。

そういえば、言葉は何不自由なく通じていたな。

異世界ならば、絶対に今まで使つっていた言葉は通じないはずなのに。

そう考えてみると、ここは案外異世界などではなく、今まで暮らしてきた世界と同じなのかもしれない。

そんなことを考えながら、ベッドの横、窓の外を見る。日没が近いのか、空は赤く染まっていた。

「いや、異世界だらうな。……残念ながら

回復魔法や魔法使い。

そんなもの現実に存在するわけがないじゃないか。

頭の中の考えを打ち切り、俺はベッドで眠りについた。

それから田が覚めたのは恐らく翌日の朝。

時計がないから詳しくは分からぬけれど、空を見る限りそれくらいだろう。

俺が寝ていた部屋には誰もおらず、特に昨日と変わっている様子もない。

痛む右腕をかばいながらベッドから立ち上がる。

昨日には気付かなかつたが、俺の首には三角巾がかけられ、しっかりと右腕を固定していた。

回復魔法といつても、完璧に、一瞬にして治せるわけではないのだろつか？

そちら辺のことについては、今日はいろんな人に聞いてみよ。魔法使いだと誤解されているけれど、そんなものすぐに解くことができるはずだ。

木製のドアに手を掛け、小さな部屋から外に出ると、温かい日差し

を全身に感じることができた。

その気持ちよさに身を委ねながら、しばらく上空を見上げていると、

なにやら騒がしい声が聞こえてくる。

その発信源を辿ってみると、いくらかの木製の家が立ち並ぶその中

心。

少し開けたような広場に何やら人だかりができていた。

時折、歓声のようなものが上がりついているが、ここからでは何が起つているのか見ることはできない。

少し気になることではあるけれど、今はあの人だかりに突っ込んで行けるような状態ではないのだ。

「おや、おはよう」

不意に掛けられた声に振り向く、そこには昨日の老人の笑顔があつた。

「おはようございます」

挨拶を返すと、老人はより一層優しい笑みになり、それに伴つて俺の心も安堵に包まれる。

この人にいろいろ聞いてみるのが、やっぱり一番良いのかもしれません。

い。

そう思つて口を開こうとする。

しかし、その言葉を老人の声が遮つた。

「悪いんじゃが、わしはこれから出かけなくてはならん。お主の世

話は「

広場の人だかりを睨むが、皆それどころではないようである。少し困ったような顔をした後、老人はひらめいたように切り出した。そして、村の奥の一軒家を指差す。

「あの家を訪ねなさい。男が一人住んでいるから」

それだけ言うと老人は去つていってしまった。

また聞きそびれた。

苦笑いしながら頭を搔くと、人だかりを横目に、目当ての家へと歩き出した。

その瞬間。

うごめく群集の隙間から、中心にいる人物が垣間見えた。

道化師。

不気味な仮面をかぶつた道化師が、こちらを見つめていたような気がした。

4・下卑の襲来

生い茂る木々に囲まれた、木製の家。

ドアの前に立ちながら見上げると、それは二段や三段建てのようだった。

背中越しに聞こえる騒がしさに、少しばかりの鬱陶しさを感じながら、頼りないドアを呟く。

しかし、返事はない。

出かけているのだろうか？

諦めて立ち去ったとした時、頭上から声が響いた。

「じゅら様か分かりませんけど、勝手に入つてくださいーー」

やる気のない男性の声は、一階から聞こえてくる。

それにもしても、あのお爺さん。

この家の人俺が来ることを伝えていないのだろうか。

だけれどまあ、とりあえずはこの人に会つてみるしかない。

今の俺は右も左も分からない、赤ん坊と同じなのだから。

ドアノブへと手を掛けると、軋む音を上げながら扉は開いた。

鍵が掛かっていないのか、それ以前に鍵という概念がないのかは分からなけれど、とりあえず一安心だ。

一步踏み出し家中に入ると、埃が舞い鼻をくすぐる。

それを、小さな窓から差す明かりが照らしている。

もう一つ照らすのは無数の本棚。

部屋の壁際の全てには、せつしりと本が詰め込まれた棚が並んでいた。

背表紙に見たこともない字が書かれたその本はよく見ると、辺りの床にも散乱している。

そんな本を踏まないよう、慎重に奥の階段へと辿り着くと、一階から一人の男性が降りてきた。

「えーっと、どちら様かな？」

うつすらと無精ひげが生えたあごをいじりながら、男性は視線を向ける。

その瞳はとても優しくて、たとえ早とちりだとしても人柄の良さを感じさせるのに十分なものだった。

「あ、あの……話は聞いていませんか？」

圧迫された空間で初対面の人と二人きり。人見知りという性格が発動するのに打って付けの環境に、恐る恐る口を開くが、上手く舌が回らない。
しかしそんな様子に眉をひそめる事も無く、男性は少しの笑みを浮かべていた。

「いや、心当たりは無いけど。まあ、とりあえず上がりなさい」

優しい声でそう言つと、降りかけていた階段を引き返していく。

その後に続きながら、男性の後ろ姿を見ると、俺の頭より遥か上にそれが存在していることに気付いた。

上の段に立っているのだからという理由で片付けてしまえばそれで、いや、そんな理由では片付けられないほどに、まるで小人にな

つてしまつたかのような錯覚を感じてしまつ。

別に前の姿の時だつてそんなに大きくなかったし、今だつて巨人と小人なんて大袈裟な例えをするほどに差が広がつてゐる訳ではないはずだ。

なのにどうしても、どんなに考えを消そうとしたって、どんなに目を背けようとしたって、例えば今のように誰かの後ろをついて歩くとき、誰かとすれ違うような時にさえ、自分の変化を突きつけられてしまつ。

「……あの……」

急な感傷に浸るのは頭が冷静さを取り戻したからなのか、それとも振り返る優しい瞳のせいなのか。

それを考へる氣も無ければ、考へる余裕も無い。

大好きなおかずを最後に残しておくように、今一番やりたくないことを先延ばしにしても、何の得も無ければ何の経験にもならない。後で圧し掛かつたときの重さは、痛いほどに分かっているつもりだから。

「鏡……つてありますか？」

男性が少し、怪訝な顔をした。

先に断りを入れておくとするなら、俺は別に前髪を気にしていたり、

化粧の崩れを懸念しているわけではない。

かといって、自分の顔を四六時中、二十四時間眺めていたいほどナルシストなのかと言われば、それもはつきりと否定することができる。

そもそもはその、髪の毛の様子だとか、自らの顔面だとかを確認したいのだ。

まあ結果として、たぶん化粧なんかはしていないんだろうけれど、それ以上の、特殊メイクよりもさらに凄まじい変貌を遂げているだろう事は予想できる。

だけどそれと同時に、俺の予想なんかも簡単に上回るような変貌を遂げているだろう事も、予想できるのだった。

「つと……。これでいいのかな？」

目前の男性の声から、鏡が俺の前に運ばれてきたことが分かる。しかしそだ、自分の姿を確認することはしない。

人間誰しも心の準備というものが必要で、それを怠った場合は後々に大変なことになると思つから。

「何か魔術でも始めるのか？ 危険なものはやめてくれよ」

問には答えず、ゆっくりと瞼への力を緩める。

その隙間から白い光が差し込み、次第に鮮明な景色へと変わっていく。

瞳へと飛び込む自分の姿。

低めの身長に小柄な体。

痛々しい三角巾。

首元まで伸びる、くせつ毛氣味の濃い栗色の髪。
頭の上には

道化師。
ドウジ

「……っ！ 誰だお前は！」

響く声に振り返る暇など無く、すぐに視線が傾く。
倒れている。

そう気付くのにあまり時間は掛からなかつた。
冷たい床へと倒れこみ、右腕へと走る激痛は意識を現実へと連れ戻す。

しかし、起じつた出来事に脳がついていく事ができない。

「まあまあ、落ち着いてくださいな。旅の道化師……じゃ通用しませんかねえ？」

俺の頭上で口も動かさずにしゃべる道化師。

それは当然、奴は仮面を被つている。

不気味に笑う仮面は、さつき見たそれと同じものだった。

「ンハハハハハ。 そう怖がりなさんな」

子供のような、しかし残虐を含む笑い声。

あまりの奇妙さにたまらず視線をそらすと、それに気が付いたのか、道化師は俺の耳元へと仮面の顔を近づけた。

「まつ、その顔もかわいいけどねえ」

5・魔術の憤慨

「ンハツ、後で殺してあげますからねえ」

手足を縛られた俺たちを嘲笑いつゝに見下しながら、道化師は部屋の中を物色する。

もちろん、こんな状況になるまでに抵抗をしなかつたわけではない。俺だって、溢れ出る恐怖を抑えながら奴に一矢報いてやるひつと奮闘した。

けれども、こんな小さな体でできる抵抗なんてたかが知れているわけで、おまけに怪我を負っている今となつては俺をあしらつ事など、赤子の手をひねるよつに簡単なのだ。

「おい、お前は何が目的なんだ？」

こんな突然の事態にも冷静さを保ち続ける、この家の主。まだ名前は聞いていなかつたけれど、そんな彼だつて抵抗をしなかつたはずは無い。

見た目にはとても強そうには思えない人だつたけれど、こんな姿の俺よりは目の前の敵を打ち負かす可能性を秘めている。

そんな期待を寄せてみても、やつぱりというか案の定といつゝか、日常的に人を殺していいますといつた具合の道化師にはあつさつとは言わないまでも、負けてしまつたのである。

見たところ四十歳くらいだし、しょうがないのかもしれないけれど。

そんな男性の問いを無視しつゝ、一つ一つ本棚から本を取り出し、眺めては床に投げ捨てていく道化師を横目に、隙を突いて両手両足を動かす。

縄を抜けるためのその行動も、何の意味も無く自分を苦しめるだけだった。

「いってえ……」

固定されていていた痛みが、再び右腕を駆け巡る。激痛、とまではいかないが、じわじわと続く嫌な痛みだった

「大丈夫か？」

苦痛に歪む俺に気付き、男性は体を握り問い合わせる。

「まあ、なんとか……。あれ？」

少しばかりの強がりを含んだ言葉で返事をすると、男性の手が俺の右腕へと差し出されていた。
縛られていたんじゃなかつ

「静かに！」

低く唸るような小声に、たまらず口をつぐむと、慌てて道化師のほうを見る。

気が付いたらやばい。

男性がどうやって縄から抜けたのかは分からなければ、これは状況を一転させる大チャンスだ。

幸いにも道化師は目的を果たすことに必死のようで、一いつひらの声に

気が付く」とも無ければ、背中を向けて」ひらりの様子を見ることもできない。

驚きと緊張とが混ざった、居心地の悪さの中で男性を見つめる。
考えなければ、ここから逃げ出す方法を。

思いつかなければ、皆が助かるような策を。

落ち着くとすればするほどに、頭の中がこんがらがっていく。

「……あ」

自分以外には聞こえないほどに、小さな声で漏れ出す言葉。
混乱する気持ちを溶かすように、男性の大きな手が頭の上に置かれ
ていた。

と同時に、自由になる手足。

それはまるで、魔法のよつだった。

「逃げるよ」

小さな声でやつて、野性はつづと立ち上がる。
真剣な瞳に捕らえるのは奇妙な道化師。

男性が走り、ピロロが振り向く。

そして俺が逃げ出すのはほぼ同時の出来事だった。

走る。

ただひたすらに走る。

右腕への痛みなんか気にしなくても良いほどに、ほかの場所が悲鳴を上げるほどに。

背後の騒音に後ろ髪を引かれながら、自分に言い聞かせるのはたつた一つのことだった。

『俺ではどうしようもない』

だからこそ、もっと強い人や俺よりも力になってくれる人を連れてくるのが俺の役目だ。

その間に死んでしまつたら?
手遅れになつてしまつたら?

余計な雑念に頭を振るい、のどかな村を駆け抜ける。

最初に出会ったのは昨日の屈強な男だった。

「どうしたんだ、嬢ちゃん?」

息を切らす俺に、不審な目を向ける。

女の子扱いされていることも、こんな緊迫した状況では気に障ることはない。

とにかく、余裕がないのだ。

「と、とにかく早く来てください!」

左手で男の腕をつかみ、強引に引っ張る。しかし、その腕が動くことは無かった。

「一体なんだってんだ？　まずは理由を！」

「早く！」

言うと同時に鳴り響く爆発音。

方角は真後ろ。

俺が逃げ出してきた家からだった。

「くつそ、あのじじいっ！」

男は何かに気付いた様に走り出す。

腰の剣を揺らしながら走る男に、付いていくことはできなかつた。

全く、この体じゃあ体力まで落ちてるのかよ。

力なく地べたに座り込む。

もくもくと伸びる煙は遙か空まで上がつていた。

6・消炭の辞典

燃えていた。

少し近づいただけで熱気を感じ、命の危険を感じるほどに、真っ赤に燃え盛っていた。

音を立てて崩れる家の残骸に、ゆっくりと近づく。

「……嘘だろ」

この世界に来てから何度か口にした言葉を呟く。

嘘な訳は無い、今俺の前では見たことも無いような光景が、現実的に広がっているのだ。

火事なんて元の世界でも珍しいことでは無かつたけれど、それに自分が巻き込まれたり、もつと言えば生で見たことだって無い。

物珍しさと少しの恐怖心で、燃える炎を見つめる。

だけど、そんな事よりももっと重要なことが、俺の心の中では渦巻いていた。

あの人は無事だらうか。

身を挺して俺を逃がしてくれた、いわゆる命の恩人。

「無事みたいだな」

心配は单なる杞憂に終わつた。

呼びかけられて振り向くと、立っていたのは一人の男性だった。見紛う事無きの人。

「はい。あの……大丈夫ですか」

目線を少し、男性の頭部へと向ける。

綺麗に切り揃えられた白髪の短髪は乱れ、赤黒い血に染まっていた。

「ああ、これかい？ 大丈夫だよ、もう傷は塞がってるからね」

頭を抑えながら、少しの笑みを浮かべる。

いくら本人が大丈夫って言つたつて、安心できるような血の量ではない。

それに頭なんて、下手すりや死んでしまうような場所じゃないか。

「本当に大丈 」

「おい、じじい！ まだ話は終わってないぞ、一体なんでこんな事になつてんだ！ 早く説明しろ！」

言いかけて聞こえてきたのは俺が助けとして呼んできた男性の声。怪我をしている男性に容赦なく詰め寄る様子は、見ていて気持ちがいいものではなかった。

「俺はまだじじいなんて呼ばれる歳じゃないんだけどなあ。それに説明ならさつきからしてるだろう？ 突然変な道化 」

「だからそれがおかしいんだって言つてんだろー。」

ほんやりと炎を見つめながら話を適当に聞き流す。

それにもしても、この人は人の喋りを妨害するのが好きなんだろ？か。
最初に見たときはこんな人だとは思わなかつたんだけど。

「いや、本当なんだよ。ほら、君からも何とか言つてくれよ」

話を振られても俺は答えようとはしない。

なんせ隣からは家が燃え、崩れる音が鳴り続いているのだから、このままで良いはずが無いだろう。

これ以上放置してしまえば、木々に囲まれているこの場所、いつ燃え移つてもおかしくない。

未だに燃え広がっていないのが、不思議なくらいなのだ。

「あの、それよりこれ！ 消さないと大変ですよ！」

どうやつて消すか、なんていうのは原始的な方法しか思いつかないけれど、幸いにも騒ぎを聞きつけた人たちがそれなりに集まってきたるし、なんの役にも立たないなんて事は無いだろう。

「ほり、皆さん！ こうじつ時こそバケツリレーですよ！ バケツリレーー！」

野次馬たちに向かつてできるだけ大きな声を出すが、表情を見る限り俺の言葉があまりピンときていなかった。

バケツ、ないのか？

「あの、えーっとほら、とにかく水を」

我ながら情けないほど必死に呼びかけるが、誰一人動こうとしない。
どうか、こいつこいつて消そうとするのが普通じゃないのか？
消防車だつて無いだろ？」、村の皆総出で事に当たるのが普通じゃないのか？

「バケツなんとかって言つのが何なのは分からぬけど、とりあえず、下がつてくれるかな」

動いたのは俺の命の恩人、たつた一人だった。
喚く俺を片手で制し、燃え盛る炎へと一步、また一步と近づいていく。

一体何をしようというのだろうか、バケツリレーの先頭がやりたいとかそういう……いや、でもバケツリレーを知らないって言つてしまつ。

的外れにも程がある考えを頭の隅に追いやり、言われたとおり数歩後ずさる。

男性は炎の直前で足を止めると、地べたに胡坐を搔き、座り込んでしまつた。

何を始めるのか、そんな事を聞けるよつた雰囲気ではなかつた。

「あつ……！」

崩れ落ちる家の上空、ちょうど真上の辺りから異変が始まる。

空間が捻じ曲がったように、光を屈折しながらうねり、混ざり合つ
それはまるで大きな水槽のようだ。

しかし、周りの人間は決して歓声や感嘆の声をあげることはない。
すでに見慣れたことであるといつ証だった。

「こんなもんかな？」

全ての仕事が終わつた様に、男性が立ち上がる。

と同時に、揺れる空間は本物の水となり、辺りへ降り注いだ。

大きなバケツをぶちまけたような水流は瞬く間に炎を鎮火していく。

人生で始めてみる魔法。

それは意外にもあっけなく、呪文や魔方陣なんて必要としない、も
はや完璧なる超常現象だった。

「ああ、真っ黒だ……。これはもう使い物にならないな」

湿つた燃えカスの山の上で、男性が一つの本をつまむ。
表紙からかろうじて本だと分かるその中身は、見るも無残に黒焦げ
になつっていた。

「防火魔法、掛けといったのになあ」

7・不毛の口論

少しの苦笑いを浮かべながら男性がその本を振るうと、からうじてとどめていた原形は崩れ、はらはらと土に返つていく。魔法と呼ぶに相応しい現象を見た後だと、そんな仕草でさえもまるで仙人のように神秘的に思えた。

「しつかし、これはやり過ぎだよなあ……」

そう呟きながら、すっかり火が収まつた家の残骸を名残惜しそうに振り返りつつ、男性はこちらへと戻つてくる。

そういうば、この家はなぜ燃えてしまつたのだろうか。

あの道化師が燃やした、それが一番妥当な氣もするけれど、それならばそもそも目的はなんだつたのだろうか。

あの魔法について問い合わせたい気持ちもあつたけれど、今は身の安全を確認するのが一番だろう。

「……あの、すいません」

未だ変わり果てた我が家を見つめていた男性は、俺の呼びかけに振り返つた。

「さつきのあいつ……あの道化師は何処へ行つたんですか？」

俺の問いを聞いた男性は隣にいる男に得意げな顔を向けた後、事の真相を話し出す。

「あっちの森に逃げてつたよ。また襲つて来るかもしないから、警戒しておいたほうがいい」

そう、男に注意をする男性。

今思えば、俺が助けに呼んだ男は体格も頑丈そうだし、何しろ武器を持っている。

この村には自警団みたいなものがあるのかもしない。
しかし、そんな男は未だ納得していない様子だった。

「だからさつきから言つてるだろ？ お前が言つ道化師は？」

「私がどうかしましたかな？」

一人の会話に耳を傾けていた俺は背後から突如聞こえた声に、振り向くことができなかつた。

先程の狂気染みた声色とは違い、今はむしろ相手に好印象を抱かせるような落ち着いた声だ。

だけど、裏の一面を知つてゐるからこそ、それは恐怖をより一層高めるに過ぎない。

「お前はつ……！」

そんな声の主を見た男性の表情が強張る。

それによつて俺の疑いが確信へと変わり、振り返りつつする足を止めてしまつ。

そのまま動くことができなくなつてしまつた俺の頭に、ふいに誰か

の手が乗せられた。

位置関係からいつてその人物は明らかであり、すぐに恐怖が心を支配する。

それを振り払うように、俺は勢いよく振り返った。

「おやおや、怖がらせてしまったかな？」

仮面をはずし、白い化粧が施された顔を晒しているものの、その服装にその身に纏う雰囲気、見間違えるはずもないあの道化師だった。普通異世界に来てこうこうピンチに巻き込まれたら、秘めたる力が覚醒するものだと思っていたけれど、全く持つてそんな様子は無く、俺はただ震える足を必死に動かして後ずさることしかできない。傍から見ればそれはずいぶんと情けないものだと思うけれど、そんなことを気にしている余裕すら俺の心にはなかつたのである。

「お前は何者なんだ？」

怯える俺と不気味な道化師の間に割つて入つた男性は先程までとは違う低めの、まるで敵を威嚇するかのような声で道化師に問い合わせた。

そんな頼れる男性とは違い、横でただ傍観する腰に剣を携えた屈強な男。

こういふときこそ、その剣が役に立つときではないのかと目で訴えかけるが、男は俺の救援要請に全く気付くことなく、そもそも今日の前にいる危険人物をほんの一つも敵視していなかつた。

「おい、じじい！ この人は旅の道化師さんだぞ？ 何突つかかっ

てんだよー。」

そう言つて男性の非礼を詫びる男。

「こいつがただの旅の道化師？

ならこの道化師は人を殺すために旅をしているのだろうか。

「いや、でもこいつはさつき俺とこの娘を縛つて殺そうとしたんだぞ？ それに家が燃えたのだってこいつの魔法のせいだ」

「何を物騒なこと言つてやがる。魔法だつて？ この道化師さんのどこの魔道証が付いてるってんだ？」

まどろじょう。

何やら聞き慣れない言葉が出てきたけど、今はとてもその意味を聞えるような雰囲気でも状況でもない。

片や道化師を擁護している人がいるとはいえ、俺と男性にとつては恐怖の対象でしかないものである。

下手に動けば殺されかねないのだから、氣を緩めるわけにはいかない。

「そんなことは幾らでも説明が付くだろ？ 魔法を犯罪に使つような輩がわざわざ魔道証を付けるとでも思つてているのか？」

話に全く付いていけない俺は複雑な心境のままに耳を傾ける。しかし次に飛び込んできたのはあの道化師の声だった。

「なんとー、私が罪人だとでも言つのですか？ それは全くの見当

「違うで、」
「えこますよ。第一私は魔法が使えません。それに、彼の言う通り魔道証だって何処にも付けていないではありませんか」

道化師は犯罪者と呼ばれ、心底嫌そうな顔をしながら血の罪を否定して見せた。

その清々しいまでの態度に事件の被害者でなければ、俺もすっかり騙されただろう。

時折除く狂氣でさえも、その衣装のせいだと誤魔化してしまつのである。

「あくまでとぼける気だな。お前みたいな奴が大人しく国に従うとは思えない。そう言つただろう?」

「それこそが的外れだというのですよ。私は何より平穏を愛する者でしてね。自ら反逆なんてしません」

あくまで平静を維持しながら肩を竦める道化師。

表情すら全く変わらないその姿は、もしやこいつは俺たちを襲った道化師とは別人なんじゃないか、そして俺たちは全く無関係な人にとってはともない失礼を働いているのではないか、等と思わせてしまうほどの堂々とした態度だった。

「それに、反逆者といえば貴方の方ではありませんか？ 先程の技を見るに貴方は魔法使い、魔術師なのでしょう？ 魔道証を身に着けるのが決まりというものではないのですか？」

道化師の矢を射たのであらう発言に男性が更なる反論を加えようとする。

しかし、その言葉は予想外の人物によつて遮られたこととなつた。

「お前さん達！ 何の騒ぎじゃ？」

少しばかりの山菜などが入つた籠を片手に、今朝会つたあの老人がこちらへ小走りに向かつてくる。

その顔には驚きの表情が浮かんでいた。

8・悪意の長

おそらく今収穫してきたものであらう山菜を箸に詰め込み、中身が飛び出さんばかりに腕を振りながら近づくお爺さんに、村人と俺たちの視線が注がれる。

最初に口を開いたのはあの道化師だった。

「おやおや村長殿。そんなに慌てなさつて一体どうしたのですかな？」

村長。

その見た目や振る舞いから、このお爺さんは村における偉い人なんじやないかと思っていたけれど、その予想はぴったりと的中していたようである。

そんな村長さんは道化師の問いに、未だ慌てながらも必死に答えを返した。

「どうしたも何も、村から煙が上がっているから来てみれば、一体何なんだこれは！　こんな状況で落ち着いていられるか！」

その取り乱した姿を見た村人たちは傍観をやめ、村長を宥めにかかる。

そんな行動が功を奏したのか、村長は一度深く息を吐き出すと、今朝のような落ち着いた表情で村人たちの方を向いた。

「すまん、年甲斐もないことをしてしまったよ。ありがと、もう落ち着いた。」

優しさにあふれた声で礼を言つ村長。

しかしその視線が俺の真横にいる人に向けられたとき、まるで人が変わったかのように村長は至極真剣な表情になる。

そう、あの男性だ。

つこさつき魔法を使つたあの男性。

「……これがどうこうとか、ちゃんと説明してくれるかね？」

二一君

二一と呼ばれた男性はその言葉をしつかりと受け止め、村長の目を冷めた瞳で見つめ返していた。

「何つて言われてもなあ、もう説明することなんかないんだよ。さつきから言つてる通りだ」

あれから案内された村長の家に、俺たち三人は座っていた。
三人というのは俺、二一さん、そして村長さんだ。

もう大分話し合いを続いているが、

あの道化師は今もこの部屋にはいない。

どう考へてもこの事件の首謀者であるあいつはびつやうり村長の疑いから外されていようである。

「お前さんの言いつ」とを信じてやりたいのも山々なんだがな、わしにはあの方を疑ひつことはできんのだよ。古くからの親友に紹介された、信頼のおけるお方だからのう」

村長さんの少し苦しげな言葉を聞きながら、俺は少し落ち着かない気持ちだった。

そりやあ見知らぬ場所で見知らぬ人達と何か真面目な話し合いをしているのだから、緊張ぐらうして当然だけれど、理由はそれだけではない。

さつきからずつとこの部屋にいる人数以上の視線が俺たちに注がれていっているのだ。

村長さんはその発信源である俺とコーヒーさんの後ろ、窓の向うを見ながら、呆れた様な表情を浮かべた。

その視線が何のものなのかについて俺は大体の見当をつけることができている。

大きな理由としては村長さんの後ろ側の壁、そこにも備え付けられている窓から、時折結構な数の人影が押し合いつぶつに揺らめいているのだ。

恐らく野次馬根性丸出しの村人達が、様子を見に来ているのだろう。そんな村人達を知つてか知らずか、コーヒーさんは先程までと同じ調子で話を進める。

「そりゃあ、爺さんの気持ちだってわかるぞ。俺を信用できないっていつのもわかる。だけど待ってくれ」

そう言つと、今まで組んでいた両手を崩し、片方の手を隣にいる俺の頭へと乗せた。

「証人は俺だけじゃないんだ。この子だってあいつに襲われた。目撃者が一人、ってのは大きいと思つぜ?」

「ヤリと笑うコニーさんを見て、村長はため息をつく。そして髪を弄りながら、見定める様な視線を俺へと向けた。

「お前さんを信用できないといつのはもつともな話じや。残念ながら。だが、この娘さんだって信用はできないのじやよ」

緊張をほぐすかのように、村長は背もたれに体重を預ける。そんな彼の発言に俺が疑問を抱くことはなかった。

「この村の奴じゃないから……か?」

俺はこの村の人間ではない。

むしろ、この世界の人間ですらないのだ。

村長にとつても、この世界にとつても、俺は突然湧いて出た存在だ。

「その通りじゃよ、コニー君。悪いが君も、そこのお嬢さんも、信

用する」とはできませんのじゃ」「

理屈は理解できる。

村長が俺を信用しないのは見ず知らずの人間だから。だけど何故、『お元気の』コニーさんのことを頑なに信じようとしたのか。

彼はこの村の人の筈なのに。

「それを言われちゃあ、お終いだ。確かにこの子は村で見かけた事の無い人間だからな」

コニーさんも脱力したように、背もたれに寄りかかった。

「あーあ、『おやつ』って正直者は馬鹿を見るんだ。せいぜいあの極悪人を信じてるがいいわ」

そう吐き捨てるど、コニーさんは家を出て行こうとする。それに伴ってざわめく村人達に、村長は呆れたよつたため息をついた。

「待ちたまえ、コニー君」

村長の呼びかけに、再び影が揺らめく。振り返ったコニーさんは無言で村長を見つめた。

「『お嬢さんは怪我をしておる。それが治るまで、お前さんに面

倒を見てもいいおつと想ひて向かわせたのじゃが……。話は聞いておらんかの？」

そう言えばそんな話だった様な気がする。

だけど今思えば、何故口一一さんにそれを頼むのだろうか。

俺も所詮、歓迎されてはいない面倒事、といつ事なのだろう。

まあ治療をしてくれた上に、面倒を見てくれる。

本来は有り余る恩なんだけれど。

「聞く暇もなかつたわ。変なピエロさんに殺されかけたんですね」

皮肉つたような言動に村長の表情が歪むが、それが言葉に現れる事はなかつた。

「……まあ、ここ。とにかくしつこい事じゅう。後は任せせるわ」

村長の言葉を聞いた口一一さんはその場で口を開く。

「じやあ、ほら。行べや」

「は、は……」

俺はその声に立ち上がるが、この場ではじめての言葉を発す。俺は同じ、信じてもらえなかつた。

そんな悔しさと共に、俺と口一一さんは家を後にした。

9・馬車の出発

「あ、あの、家はさつき燃えちゃいましたよね……？」

「二一さん家の道を戻りながら、先を行く背中に話しかける。その影はもうほとんど見えなくなり、見上げた空には夕日が沈みかかっていた。

俺が今日目覚めたのは朝ではなく、昼頃であったのかもしれない。それとも、結構な長い時間を話し合いでに費やしていたのだろうか。

「ああ、さうだな。 あつや全焼だ」

まるで気にしていないかのような返事。
自分の家、それにあの大量の本でさえ全部燃えてしまつたかもしれないのに。

「じゃあ、どうするんですか……？ その……寝る場所とか」

「まあ、寝よつと思えば寝れるだろつな。あの場所でも」

確かに面倒を見てくれるだけでも、

ありがたいことだ。

だけど、あそこは無理があるんじやなかろうか。

「でも、村長さんも知つてたじやないですか？ その、家が燃えちやつた」と

それなのに、この人に俺の面倒を頼んだ。
やっぱり、それ程までの厄介者なのだろうか。
俺もここの人も。

「……まあ、そんなこと気にする」とはないさ。まだ、そんなに眠くはないだろう?」

そう言ってコニーさんは前方に見える元我が家を指差した。

「もうちょっと頑張つてくれ。手伝つて欲しい事があるんだ」

焼け跡に到着した俺達、だけどコニーさんはまるでそんなものなど無いかのように、脇を通り過ぎて林へと入っていく。

「離れんなよ？ 今離れんのは危険だからな」

俺とこの人を襲った犯人はまだこの村の中、何食わぬ顔で歓迎を受けている。

十分に念を押され、まだ危険が去つていない事を実感した。

林は大体が伐採された後なのか、遠くから見ていたほどに木々が密集してはいない。

時折何かの鳴き声が聞こえる気もあるけれど、それは気のせいだといつこにしておこう。

「……よし、着いたぞ」

どんじんと前に進んでいたコニーちゃんはさう言ひて足を止めた。
その場にあつたのは杭に繋がれた一頭の馬、そして幌が張られた四輪の馬車であつた。

馬はコニーさんが近づくと、鳴き声を上げ、駆け寄ろうとする。
しかし、足に繋がれた縄がそれを許さなかつた。

「よしよし、悪かつたな。今はすしてやる」

たてがみを撫ると、更に嬉しそうな鳴き声を上げる。
先ほど聞こえたのも、この声だったのかも知れない。

「あの……」Jさんは?

縄を丁寧にはずしながら、コニーちゃんは俺の質問に答える。

「こいつか? こいつはな、村長ん家からひつぱらつたんだ。ちよ
つと前にな

かつぱらつた、つまり盗難、泥棒だ。

今までに見ていたこの人から遠いイメージに、少し驚く。
だけど直ぐに、その理由を聞いて見ることにした。

「その……何で盗んだんですか?」

はずし終わった縄を纏めながら、じわりと振り返る。その顔は何やら得意氣であった。

「盗むつていうと人聞きが悪いんだがな。何て言つか……ほら、助けてやったんだよ」

「助けた……？」

「盗んだのでは無く助けたということはこの馬、ただ単に村長に飼われていた訳ではないのだろうか。」

「そう、助けた。まあ、いろいろあってな……。それより、急いで? 日が沈んだばつかだから、夜が明けんのはまだまだ先だが、急ぐに越したことは無い」

答えは明かさずに、言葉を濁す。

言いたく無い事なのかもしれないし、そこについては追求はしないことにしておく。

そんな権限もないことだし。

だけど他にも、ローーさんは夜が明けるのを気にしている。

そちらの理由は何なのだろう。

「あの……夜が明けたら何かまずいんですか?」

夜が明けて困ること……突拍子のない事ならばいくらいでも思いつくけれど、現実的な事で言えば、あまり思いつくものではない。

单刀直入な質問に、ローーさんの表情は更に嬉しそうなものへと変

わった。

「まあ別にな、夜が明けたって構わないっちゃあ構わないんだよ。だけど夜逃げつていうくらいだから、そりゃあ夜にやらないとしないだろ?」

「あの、えっと……夜逃げですか?」

「この人は何を言つてるんだ?」

話が大幅にと、いうか、全く予想外の方向に大きくズレている。元はと言えば俺の怪我が治るまでの間、ありがたいことにこの人が面倒を見てくれるという話じやなかつたのか?

「やつ、夜逃げ」

まるで当然、元から決められていた予定を報告する様な台詞。

「あー、その、こいつから夜逃げ……をする事になつたんでしちうか?」

「?」

「考へてもみる? あのピエロは村長の公認で、しばらくなこの村に滯在する。つーことはまた、俺たちの命を狙いにくるかもしれない。そしたら、安心して眠れないだろ? そこに寝る場所も燃やされたときたら、もうビックリ他に行くしかないわ」

馬車の両側から伸びた木の棒を馬へと取り付け、家の方へと誘導していく。

それと共に説明する夜逃げの理由、必要性はとも理にかなつてい
たし、命が一番惜しいという意見にも俺は賛成だけれど……

「……いいんですか？」

「ん？」

口一ーさんは足を止め、振り返る。

「この村を出でいいんですか？　その……故郷、とかだつたりする
んじゃあ……？」

自分の生まれ育つた村なのであれば、そんなに簡単に離れてしまつ
ていいのだろうか。

命が大事なのはもつともな話で、死んでしまつたら故郷も何もない
けれど、他にも方法だつてあるはず。

例えば魔法で……

「……なんだ？　そんなことか」

俺を見る口一ーさんの顔は驚きなどでは無く、まるで呆れたような
そんな表情だった。

「いいんだいいんだ、気にすんな」

茶化す様に手を振るつと、その手で手綱を掴み、馬を家の方へ誘導していく。

そんな背中を追いかけながら、俺は再び口を開いた。

「いひつて……」

「だから気にはすんなつて。俺は元からこの村を出て行くつもりだつたんだ。あんまり村人からの評判も良くないしな」

するとマニーさんは辿り着いた焼け跡を指差し、傍らの馬をそつと撫でた。
丁寧に、優しく。

「それに思い入れがあつたのだつて、村つづりこの家だしなあ。燃えちまつたものは魔法でも戻せない。……俺の魔法じやな」

足でふやけた燃えかすを蹴り上げ、ため息をつく。
苛立ちからと思えたその行動は地面から現れた扉によつて、目的のあるものへと変化した。

「というわけで……俺の事はいいとしても、問題はお前さんの方だと思つわけだよ。この村の人間じゃないつて事は確かだよな？」

「え、ああ……はい」

錆び付いた取つ手に悪戦苦闘する姿を視界の端に捉え、その質問に答える。

「……嘘をついたところで、この先ボロが出なこと、つまらない事は万が一もない。

素直に答えるのが正解だろ？

「おー、じゃあどーから何してこの村に来たんだ？」

未だに扉は開かないのか口一言も態度も態勢を変え、扉に挑みかかっている。

少しばかり滑稽なその様子に、ひつそりと笑みがこぼれた。だけど、直ぐにその笑みは鳴りをひそめる事になる。

「ああ、えっと……その、どーかい……ですか？」

この類の質問が飛んでくる事は村長の家の時点では警戒していた。だけど今、時間差でやってきた答えられない質問。いや、答える事はできるけれど、答えてはいけない様なそんな質問に口汚いを隠せなかつた。

「やう、どーからここに来たのかだ。今度は俺が質問する番だからな、ちゃんと答えてくれよ？」

言葉だけを聞いてしまえば、軽い尋問をされてこよぶなそんな印象をうけてしまつ。

しかし、その声色は決して問いただすようなものではなく、むしろ優しく答えを引き出すようなそんな言い掛けだった。

答えてしまいたい。

素直にそう思つてしまつた。

俺は恐らく別の世界からやつてきた高校一年生の男子で、その世界には魔法も無くて、命を狙うピーハロもいなくて……

そんな風に洗いざりい話してしまつても、受け入れてくれる様な気がする。

だけど。

「すいません……。それはお詫びと言えません」

やつぱり素直に言つ事はできない。

ならばいつそ、怪しまれるのを覚悟で潔く言ひ。

それが、俺が考えた最良の選択だつた。

この世界に来てから、命を落としかけたのは二回。

その内一回は田の前にいるこの人、コニーさんが俺を助けてくれた。だから、と言つてはなんだけれど例えこの人に正体を明かしても流石に殺されることはないだらう。

だけど、右も左も分からぬ異世界である以上、下手に目立つたことはしない方がいい。

生命の価値観が、元の世界とは異なるのだ。

「その……すいません」

今こじで、質問に答えなかつたとしても多少は疑われる。だけど、それも承知の上。

せめてここだけ乗り越えて、後のことはまた後で……

「ふーん、あああひつ。じゃあまあ今度でいいか

しかし、返つて来た答えは酷く淡白で、とてもあつけないものだつた。

肩透かしというかなどと書つか……

その主である人物はやつとこを扉を開けることができた様で、その行動で更に呆気に取られてしまつ。

そんなヨーさんは俺の方に振り返ることすらなく、扉の先の暗闇を見下ろしていた。

「おお、良かった！ 無事だ無事だ。ほら、いっち来てみるー。」

途端に振り返り、新しいおもちゃを買つてもうらつた子供の様な顔で手招きをする。

一体何がそんなに嬉しいのか、近付いて覗き込むと、そこには家にあつたほどではないにしろ、沢山の本が山積みにされていた。

「……これは？」

「本だよ本！ 僕が研究に使つてた貴重な本だ。特に重要なものは前もつてここに保管しどいたんだよ」

嬉しそうな顔がもはや喜びの顔に変化したヨーさんはどうやらただの村人ではなく、研究者であったようである。
自称だから職としては何とも怪しいけれど。

積み上げられた本の中から数冊を抱え上げると、ヨーさんは後ろから馬車へと積み込んでいく。

穴の中には先程までその本があったスペースの他に、まだまだ沢山の本が埃をかぶっていた。

「おい、片手でいいからちょっと手伝ってくれないか？　本を中心には積んでくれ

ぼーっと見物をしていた俺へと、力仕事が迷い込んでくる。腕を怪我しているとは言え、治療魔法とやらをかけてもらつたせいか、ちょっと動かすくらいなら健康な腕とあまり変わりはない。これなら本を運ぶくらい朝飯前だ。

念のために片腕だけを使い、俺は馬車へと本を積み込んでいった。

俺とヨーヨーさんによつて運び込まれている本。

その大半が地下から場所を移し、馬車の車輪を軋ませる。最後の一冊であろう本を拾い上げた時、その本の表紙に何気なく目をやつた。

もちろん何が書いてあるのかは解らない、だけど薄汚れた埃の向こうの何ものにも染まることのない白い装丁に、少しの間目を奪われた。

「ほり、それで最後だろ？　貸してみろ」

名残惜しいと思いながらも、どうせ俺には読むことが出来ないということに気付き、素直にそれを手渡す。

受け取られたその本は他のものたちと同じく、馬車へと積み込まれていった。

「じゃあ本はこれで終わりだな。次は……お前だ」

その言葉を聞き終わるよりも前に、何者かによつて脇腹から掬い上げられる。

軽々と持ち上がつたその体はそのまま空中を進んでいく。

「あ、あの！　えつと、ちよつと！」

抵抗虚しくその体、いや俺の体は馬車の中へと降りられた。鏡で見た時にも思ったけれど、こんな扱いを受けるほどに俺はやっぱり子供なようである。

口一一さんに対しても見上げなくてはいけない時点で、そんなことは明解であつたけれど。

「大人しく座つてろよ？　とりあえず街までは送つてやつからな。その後はそこで考えようぜ」

子供に言つて聞かせるみつこひで下へと結びつける。

光が遮られ、少し暗くなつた馬車の中は酷く埃っぽかつた。

「それじゃあ、出発だ」

声を追つて後ろを振り返ると、口一一さんが馬車の前方へと座り、手綱を握つていた。

それを振ると同時に、馬が鳴き声を上げ、動き出す。

舗装などされていない道を馬車はゆっくりと進み出した。

どこに向かっているのか、とか、これからのこととか、不安は沢山あつたけれど、それを問いただそうという氣にもなれない。

馬車は揺れるし、周りには埃を被った本ばかり。

そんなものにやる氣を奪われ、俺はケツは押さえながら咳き込むしかなかつたのである。

馬車が走り出して、どれほど経ったのだろうか。

とは言つて見たものの、多めに見積もつても十五分、いや恐らく十分も経っていないのだろう。

言つてしまえばまだ、出発して間も無いのである。

村が少し遠ざかつたとはいえ、ケツの痛さとは対照的に目的の街へはまだまだかかりそうだ。

暇を持て余して手に取つた本も、暗くてまともに読む事が出来ない。明かりがない、という事がここまで不便だとは思わなかつた。馬車の後方の布をめぐり上げれば、月明かりで辛うじて文字を見る事ができるが、そこで気付く。

俺はこの世界の文字を読む事が出来ないのだった。

馬鹿だ、阿呆だ。

それとも疲れているのだろうか。

少し眠つて、疲れを取つたほうがいいのかもしれない。

今日はいろいろありすぎて、もう脳がくたくたに疲れ切つているのだ。

本と本の間を縫つて、埃っぽい床に横たわる。

軋む板に耳をつけると、道の鼓動が直に鼓膜へと伝わってきた。

普段ならばとても眠れるような環境ではないけれど、くたくたのこの体には豪華なベッドと何ら変わりがない様に感じる事ができる。

徐々に瞼が重くなり、視界が更なる暗闇へと落ちていく。

「……あつぶねえっ？」

共に落ちていく意識は眠りへと染まることがなく、そんな声で現実

へと引き戻された。

辺りに響き渡つたのは馬車を操るコニーさんの声。

それはどう考へても穩やかなものではなく、不安に眠氣を吹き飛ばされた俺は直ぐに起き上がつた。

と、同時に急停止する馬車。

周りに積まれた無数の本は崩れ、無残にばら撒かれていく。

その本に紛れて、俺自身の体も前方へと大きく吹き飛ばされた。

馬がいななきを上げ、馬車は完全に停止する。

少しの痛みを取り戻した右腕を庇いながら体勢を立て直すと、前で御者席に

座るコニーさんの背中へと声をかけよつとする。

が、それすらも俺は実行することが出来なかつた。

頭へと加わる力が、俺を本の影へと押し込む。

その力を發揮した腕がコニーさんの方へと引っ込んでいつたのを、辛うじて見ることができた。

「……静かにしてろ」

囁く様に発せられた声が事の重大さをありありと物語つている。一体何が起こつてゐるのか、脳内で可能性を列挙してゐる内に一つの大きな不安へと行き当たつた。

「逃げようとしたつてムダですよ？ 貴方達の行動は全て筒抜けですからね～」

そう、この声だ。

今この現状、起こりうる可能性の中で最低最悪最狂の人物が俺たち

の前に再び立ち塞がつた。

狂気じみた声は落ち着きかけていた心を、瞬く間に不安や恐怖で塗り替えていく。

カチコチに固まつた勇気が動き出す事は無く、ただ本に埋まりながら震えている事しか出来なかつた。

「また、お前か。いい加減にしつこいぞ？」

馬車の外で、ニーさんの相変わらずの声が聞こえる。
ただ一つ違つとこがあるとすれば、語尾が微かに震えている様に感じた。

氣のせいかもしれないけれど、彼だつて完全無敵のスーパーマンではない。

怖がるようなことがあつても、何ら不思議ではないのだ。
自分は隅っこで縮こまつてゐるだけのくせに、人の恐怖で更に不安が高まつていく。

酷く情けない話だ。

「しつこい、と言われましてもね、私だつて好きでこんな邊鄙な所にやつてきてゐる訳では無いんですよ。本当はサンドイッチでも持つて、ピクニッックでもしたい氣分なんですよ。あ、こんな夜にピクニッックをする人なんかいませんかね？ 普通。ンハハハハ」

何がそこまで面白いのか、道化師は壊れたおもちゃの様に笑い続ける。

しばらく続いた笑い声が止んだかと思うと、代わりに鳴り響いたのは大きな爆発音であつた。

それによつて飛ばされたのであらう砂利や木の枝が、幌へとぶつか

り音を立てる。

俺は唇を噛み締めた。

そして、再びの爆発音は俺のすぐ後ろ、馬車の前方すぐ近くから鼓膜に伝わった。

耳をつんざく様な爆音に肩をびくっと震わせると、ゆっくりと、かつ慎重に後ろを振り返る。

音を立てないように本を挿き分けると、できた隙間から顔を覗かせた。

「う、うそ……だろ?」

思わず零れた驚愕の声。

そこに広がっていた景色は予想とは遥かに遠い、戦闘の跡。大きな傷を負ったのか、馬車の少し前方、コニーさんの足元の地面には鮮血が滴り落ちている。

一方の道化師は傷一つ無く、素顔のままの薄ら笑いを浮かべていた。誰がどうみても、こちらの不利は明確だ。

もう無理だ、そう肩を落とし膝をつくと、コニーさんの叫び声が聞こえた。

「おいつ？　走れっ？　もう静かになくていいから、村の方へ走れっ？」

必死の叫びで俺を逃がそうとしてくれている。

だけれど、膝の震えも胸の座喚きも頭の混乱も、何一つ収まる事はない。

頭では解っている、ここで無抵抗でやられるより、例え結果が同じでも抵抗した方が希望がある事だってわかっている。

けど、だけど、足が震えて動かない。

いくらロニーさんを嫌っているとはいっても、命の危機とあらば村の人達も助けてくれるだろ？

この現場を見せれば、ロニーさんを見直してもくれるだろ？
だから、早くあの村に。

あの村に行かなくちゃいけない！

「……くそつー！」

苛立ちをぶつける様に、馬車の床を叩く。
相変わらず足は震えている。

だけど、何故か馬車の床板にヒビが入った。

そんなに強く叩いた訳でも、板を壊せる程の力がある訳でもないの
だから、実際問題板にヒビが入るなど、あり得ない話だ。

何が起こっているのかわからないまま、顔を上げ辺りを見回す。
すると何といふことか、ヒビが入っているのは馬車の床板だけでは
無かつた。

本は裁断されたように、幌は誰かのイタズラでぼろぼろに破かれた
ように、そんな風な亀裂が入っている。

混乱が加速する頭を落ち付けるように深呼吸をするが、状況が好転
する事はない。

すると、三たび外からの爆発音が鳴り響く。

「ロニーさん！」

あの傷ではもう一回攻撃をくらってしまえば、命が危うくなつてく
るはずだ。

そう思い音の発生源へと反射的に振り返る。

するとまた、現実を大きく超越した様で、予想の斜め上さえも遙かに通り過ぎてしまう様な現象が、俺の目へと飛び込んできた。

「な、何だよ……！」れ？」

空間が無くなっていたのである。

先程まで本が山積みになっていた景色が、ヒビを境にこぼれ落ちていぐ。

ヒビの入った板も、幌も、真っ白な空間へとこぼれ落ち、吸い込まれていった。

そんな今までで一番、非現実的な光景を畳然と呆然と眺めていると、俺の周りは既に、何もかもが無くなった真っ白の空間に支配されていた。

背中を伝う嫌な汗。

もしや、この現象はあの道化師の魔術で、不幸な事に先手を打たれてしまつたのだろうか。

だとしたらこの魔術、もしかして永遠にこの空間に閉じこめてしまふとかそういうた恐ろしいものなんじゃ……。

溢れ出そうになる涙を男の根性で何とか堪えていたと、背後から前に聞いた事のあるような声が聞こえてきた。

「やあやあ、久し振りだね。柏木正一くん、だつたかな？」

久しく呼ばれることの無かつた名前。

時間、そして期間で言えばそんなに間が空いた訳ではないけれど、その言葉はすぐ懐かしい響きを持つて、俺の耳へと届いた。

「こやこや、良くやつてくれたよ。会いたかったぜー」

漆黒の羽をはためかせながら、俺をこの世界へと導いた張本人、あの牛とも鳥とも形容出来ない悪魔が覚えのない労いの言葉をかける。そんな奴を前にして、足がすくんで動けないのは前に会つた時と同じであった。

完璧にショートしてしまった脳内回路を元通りにすべく、あれこれ考えを巡らせるが、そのどれもが役に立たないものだ。

固まつてしまつた俺を見兼ねたのか、悪魔は再び、その口を開いた。

「まあ、そんな緊張することいたねえぜ？ そんななんじゃあ、ろくなことにならねえぞ？ それに、ぼーっとしてりやああの男もそろそろ死んじまつ」

悪魔が言つのは恐らくロニーさんの事。

一瞬にして頭の中から飛んでしまつていたそのことを、こんな奴の言葉で思い出してしまつた。

「お、おい……お前」

「ん？ 何だ？」

恐れながらに恐る恐ると声を掛けないと、悪魔は何とも普通に返事を返してきた。

前に会つた時のような気迫といつのが、そういうたものを感じることは出来ず、悪魔に対してもおかしいけれど落ち着いている、そんな印象を受けた。

「……ここはどこなんだ？」

「この真っ白な空間、この非現実的な状況に納得のいく説明を求めて、悪魔へと問い合わせる。

素直に教えてくれはしないのかと思えたが、奴は右手であるこの辺りを弄ると、案外素直にその答えを教えてくれた。

「ここは俺様が作ったと言うかなんと言つか……まあ、今は所有している、とても言つておこうか。とりあえずそういう空間な訳だよ」

悪魔の所有空間。

その答えに道化師の魔術、という説は幸いにも碎け散つた。納得のいく説明では無かつたけれど、そんな俺を知つてか知らずか、悪魔は更に説明を続ける。

「時間がないからどんどん言つちやうけどね、何故君がこの空間に入れたのかといふと、それは君がどこかに行きたい！ と強く願つたからなんだよね。だから、ほら試しにもう一回頭の中で考えてみてよ。君がどこに行きたかったのか、今どこに行くべきなのか

ペラペラと俺の理解が追いつかない内に、悪魔はよく分からぬ理論を並びたてる。

俺が村に戻つて助けを呼びたい、そう強く思つたからこの空間に入ってしまったということなのだろうか。

「あ、でも君が元いた世界に戻りたいってのは駄目だからね。それはズルだし反則だし、基本的に無理だから」

少しばかりの希望まで碎くよつとやう言つと、悪魔はにたにたと氣味の悪い笑顔を浮かべる。

「さ、だから行つてみよう。君が今行くべき場所、その景色を頭の中につきのできるだけ正確にイメージするんだ。まるで自分がその場所にいるみたいに」「ん

悪魔は俺に何をさせたいのか。

何やらそれが正しいことであるかのように喋り立てていて、冷静に考えてみれば、またどこかへんてこりんな世界に飛ばされでもするんじゃないんだろうか。

それならば従う訳にはいかない。

俺は無言で悪魔を見つめる。

その意図を察したのか、奴はまた氣味の悪い笑みを浮かべた。

「そりがそりが、従わないっていついうのか。ならまあ、ここで殺してしまうけれどいいのかなあ？ 君はあの男を助けられずに、ここで人知れず死ぬことになる。それでいいのかな」

「なつ？」

まるで中にでも浮いているかのようなスピードで俺に接近すると、悪魔は俺の首を軽く握った。

殺される。

こんがらがつた頭の中から生存本能が動き出し、先ほどの悪魔の言

葉が響いた。

俺が今行くべき場所のイメージを頭の中に正確に構築する。自分がまるで、今もそこにいるかの様に。

俺が今いるのは真っ白な空間ではなく、あの村。あの村にいるんだ！

生き残るためそう強く念じると、散らばった空間の破片がまるでパズルの様にはめ込まれて行く。

それに伴って悪魔の姿は薄れていき、最後に奴は一言を残して消えていった。

「そうだそれでいい

感覚の無い地面がしつかりと土の感触を取り戻し、目の前にはあの村が広がっている。

コニーさんと道化師が戦っているあの道でもなければ悪魔の空間でもない。

寝静まつたあの村に、俺はしつかりと佇んでいた。

11・協力の失敗

何が起つてこうなってしまったのか、最初は全くわからなかつた。いや、情報を整理したところで、最初から最後までわからないところの方が多い、というかわからないところしかない、そんな状況だつた。

今現在、田の前に広がる景色は先程までいた真っ白な空間ではなく、かといってその前にいた馬車の中でもなければあの悪魔の姿も無い。既に旅立つたはずのあの村に、俺は今立つているのだつた。もう少し現状を認識するための時間が欲しい、それが本音であつたけれど、よくよく思い出してみれば、俺にはこの場所に来た理由があつたのだ。

拳を強く握り締め、あの惨状を思い出す。

コニーさんを助けなくてはならない。

そして、その願いは悔しいかな悲しいかな、俺の力では到底叶えることは出来ないのだ。

人に助けを求めるということはその人を危険に晒してしまつということだけれど、それを承知の上で、俺はあの人を助けたい。わがままを承知の上で、だ。

「すいませーん！」

この世界に来てから出したことの無いような大声で呼びかけながら、木製の家を順番に周つて行く。

小さな村とはいえ、やはり夜は締まりをちゃんとしているようだ、乱暴にドアノブを回しても、その扉が開くことはない。

しかたがないので裏手に周り、窓ガラスをドンドンと叩く。

窓の内側にあるカーテンのせいで中の様子を見る事はできないが、時間も時間だしほとんどの人が家で寝ているだろ。」

しかし、叩けど叩けど一向に反応はなく、静かな村に喧しい騒音が鳴り響くだけであった。

誰もいないのか？

そう思い他の家に向かおうとした時、反応は予想外の方向から返ってきた。

「何だあ？ 僕ん家に何か用か？」

背後から聞こえた声に振り向き、その主を見ると、昼間に何度も会つたあの屈強な男性であった。

そしてその横には見覚えのある女性がランタンを持って佇んでいる。返事をするのも忘れ、この女性どこで会つた事があるのか、これまでの出来事を思い出すと、程なくして一つの結論へと至つた。

「あ、昨日の女の子！ もう怪我は大丈夫？」

そう、この女性は俺が異世界に来て早々、狼に襲われていたところを見事な投球技術で助けようとしてくれた、あの女性であった。夜風にたなびく綺麗な金色の髪を押さえながら、女性は優しげな視線を向ける。

だが、隣にいる男性は俺に好意的ではないよつだった。

「おいおいアイナ。こいつは魔法使いだ。面倒はごめんだからな、さつやと行こ。」

男性は横目で俺を見ながら、隣のアイナさんへと話しかける。

「そもそも内緒話をしているつもりなのだろうが、物音一つないこんな夜中ではその声は丸聞こえであった。

そんな話を終えると男性は目線を俺と同じくらいうに落とし、取り繕つた優しい声で語りかける。

「嬢ちゃん、子供はもう寝る時間だ。それに俺達は用があるからな。早くコニーのじじいのところに戻った方がいい」

表面上だけの笑顔を浮かべ、似合わない声色でそう言つ。
俺が現在の肉体と同等の精神年齢であったのなら、コロコロと騙されてしまいそうだが、一応高校生である俺にそんなものは通用しなかつた。

何故、魔法使いがここまで邪険にされるのかはわからないけれど、それはただ単にこの人個人の考え方なのだろうか。

「ちょっと、人の師匠をじじいって言つのは無いんじゃないの？
第一、今ベントが一緒にいる私だつて立派な魔法使いなんですけど
ー」

ベントと呼ばれた男性とは違い、アイナさんは先程の言葉への返答を、しつかりと聞き取れるような声量で返した。
しかしアイナさんが魔法使いで、しかもコニーさんの弟子だったとは何とも予想外の話である。

「……おーおい、アイナは魔法使いじゃなくて治術師だろ？？」

内緒話の一部を匂わせる様な発言をされてしまい、少し動搖しながらベントさんはアイナさんの間違いを正す。
しかしそれは間違った訂正であったようだ。

「そんな職業はこの世にありません。それよりこの子の話を聞いてあげましょ？」「こんな夜中に只事じゃないわ。何があったの？」

この発言にベントさんも渋々話を聞くことにしてくれたようで、俺の言葉を待つ様に押し黙る。

やつとこさ発言のチャンスを手に入れた俺は一人にコニーさんの緊急事態を告げた。

確実に助けに協力してもらいつゝ為、あの道化師のことは隠して。

「……それ、本当？」

事の顛末を聞いたアイナさんは俺に確認を取る。
ゆっくりと頷いた俺を見て、アイナさんの顔が見るからに青ざめて
いった。

「ベント！ 貴方も来て！ 助けに行きましょう！」

師匠のピンチを聞き、アイナさんは隣のベントさんに協力を仰ぐ。
しかし、ベントさんは面倒臭そうに頭を搔くと、否定的な意見を口にした。

「つたく……何で俺が魔法使いのじじいを助けなきゃいけないんだ

よ

「魔法使いでも人は人でしょ！ ほら、早く武器持つて来て！ そ
こら辺の盗賊くらいわけないじゃない！」

道化師の代わりにコニーさんは盗賊に襲われている、ということにな
なっている。

「しようがないな。今回だけだぞ」

ベントさんは間接的に自分の腕を褒められた事が嬉しかったのか、
照れた様な表情で武器を取りに行つた。

「大丈夫。ああ見えてもベントは剣の腕だけは凄いのよ？ だから
安心して。それにコニーさんだって凄い魔法使い何だから大丈夫よ」

ainaさんは俺を安心させるように頭を撫でる。

少し混乱し、動搖していた俺の心も少し落ち着きを取り戻した。
やがて一本の剣を腰に差したベントさんが戻つてくると、早く現場
に向かおうと言うainaさんに少し待つてもらい、俺はある一つの
可能性を試して見る事にした。

俺がこの場所までやつて來た、あの超常現象だ。

「あの俺と手を繋いで、輪つかつていつか……円になつてもらつて
もいいですか？」

アイナさんは俺の提案、そしてうつかりミスの一人称に怪訝な顔を浮かべながらも、従つてくれた。

しかし、俺の負傷した手を気遣つ様に手を繋いでくれたアイナさんは違う、ベントさんが差し出したのは自らの腕ではなく腰に差したものよりも短い一本の短剣であった。

「ちょっとベント！」

その行動にアイナさんが咎める様な声を出す。

「悪いが、こればかりはしちゃがない」

ベントさんとはアイナさんの声に従つ事はない。
アイナさんの謝罪の視線を受けながら、俺はその短剣の鞘を掴んだ。
やっぱり、ベントさんは魔法使いが嫌いなのだろう。

「それじゃあこきますね……」

ベントさんとアイナさんが生身の手を繋いだのを見て、俺は呻つ。瞳を閉じて、あの場所をイメージする。

怪我を負つたロニーさん、そしてあの道化師、馬車。
俺にアイナさん、ベントさんはあの場所にいるのだ、そつ思い込み、ワープを試みる。

果てしなく続く様な静寂が終わり、俺はゆっくりと瞼を持ち上げた。

「おやおや、これは驚いた……！」

視覚と聴覚、その両方に飛び込んで来たのはアイナさんでもベントさんでもなく、そしてコニーさんでもない、あの道化師だった。ワープ、瞬間移動は成功したのだ。

しかし、よりによつてこいつの田の前に飛ぶとは本当に運が無い。だけど、今回は味方がいる。

硬直した体に鞭をうち、辺りを見回した。

「うわ……まじかよ」

そこにあの一人の姿は無かつた。

背筋が凍り、冷や汗が伝づ。

やばいやばい、これは最悪の事態だ。

そして、不意に気付く左手の感触に田を向けると、まるで俺を馬鹿にしたかのようにあの短剣だけがずしりと存在感を放っていた。こんなもの……、こんなものだけあってもどうしようもないじゃないか。

「これは一体どうした事でしうかねえ？ 貴方、それはあの魔法なんですか？ だとしたら、私も流石に驚きましたよ」

仮面に阻まれる事のない道化師の顔は彼の発言通り、純粹な驚きにそまつており、じゅりへと近付くその足取りもふらふらと落ち着かないものだった。

俺がじりじりと後ずさると、付かず離れずで道化師もじゅりへとやってくる。

しかし、先に足が止まつたのは不幸にも俺の方であった。

恐怖で足がもつれた訳ではなく、地面に落ちている何かにつまずき、勢い良く尻餅を付く。

驚きながら衝撃を覚悟するが、そのつまづいた何かが柔らかいクッシュョンとなり、衝撃はほとんどなかつた。

後ろ手に付いた掌に、べちゃつとした感覚が纏わり付く。ゆっくりと掌を見ると、その真っ赤な光景に意識が遠のきやうになつた。

貧血のような状態に陥り、多量の血に染まつた掌を視界の外へと無理矢理に追い払う。

「おやおや、死人をソファーにするなど随分と肝が座っていますなあー。ンハハハハハ」

俺の突然の出現に関しての驚きから解放されたのか、道化師はしつかりとした足取りで、奇妙で不気味な狂つた笑い声を上げる。そして、共に発せられた言葉の内容に、嫌な予感が脳内を駆け巡つた。

「う……うああ……」

その予感は少しもぶれる事なく的中し、俺の心を負の意味で激しく揺さぶる。

俺の下に倒れていたのは紛れもない、あのコニーさんであった。情けない声を上げながら跳び退き、目線を再び道化師の方へ移すと、奴は更なる笑みを浮かべ、目前へと迫つていた。

逃げなくちや。

その言葉だけが脳内にいくつも並び立てられ、消えていく。

あの瞬間移動で村に戻れば、俺は助かる。

しかしそれから助けを呼んだところで、村からここまで最低でも十分くらいはかかるてしまう。

それじゃあ間に合わない、ヨーちゃんは早く治療すれば助かるかもしないのに。

なんで……

「何で人は連れてこれないんだよ！」

左手の短剣を勢い良く地面に叩きつけると、反動で鞘が抜け、それは道化師の足元へと転がって行った。

あの瞬間移動で連れてこれたのは意志も持たぬこの短剣だけ。使う人が使えば救いとなるその武器も、何の心得もないものが持つたところで絶望しか生まなかつた。

「……人を連れてこれなかつた？」

道化師はそう呟くと、思案するより前に足を止める。

そして次の瞬間、狂ったような高笑いを始めた。

「ンハハハハハ！ そりやあそうですよ！ 貴方の魔法は恐らく142ページの次元的空間転移魔法。大元のそれなら他人を巻き込む事もできたでしょうが、貴方は縮小版。所謂偽物なのですから、そこまで期待するのは馬鹿というものですよー！」

その言葉は理解に苦しむ単語のオンパレードで、一体何が言いたいのか全くもつてわからない。

そしてそんな俺の表情を読み取ったのか、道化師は微笑と共に言葉を続けた。

「ほう、何も知らない、何もわからぬといった顔ですねえ、それは。やっぱり貴方も馬鹿ですよ。そして……」

振り上げた道化師の右手が、強烈な光を発する。
眼がくらみ、反射的に眼を閉じてしまう。
まずい、このままじゃ……

「馬鹿は早く死ぬべきですー！」

死ぬ。

殺氣を纏つた道化師の声に、俺は急いで脳内にイメージを組み立てていった。

瞼越しから伝わる光の強さが増し、体を強張らせるが、爆発音は全く見当違いの方向から聞こえてきた。

飛んでくる小石や砂を腕で防ぎながらゆっくりと目を開けると、遠くにあの道化師の背中が見える。

想像した場所とは少しずれていたけれど、瞬間移動の成功だ。道化師の放った光弾が着弾した場所を見ると、激しく舞い上がる砂埃に阻まれて、地面すら視認できない。

そしてそのおかげか、道化師は俺が移動したことにもまだ気付いていないようだった。

よし、今の内に……。

足音を立てないように慎重に立ち上がり、道を逸れた脇にある樹の影へと身を潜める。

まだ絶対的な安心を得た訳ではないが、一時的な安堵に背中を預け座り込むと、左手に握られたままの短剣へと視線を向けた。

刃渡り15センチはあるとかというその刀身には溝が穿たれている。そして、怪しく光る両刃は平和ボケした世界の人間から見ると、とても危なく物騒なものだった。

これであいつに反抗してやろうか、そんな一時の氣の迷いとも取れる考えが浮かぶが、柄を握る弱々しく真っ白な手を見ると、そんな思考は一瞬にして吹き飛んでしまった。

「ビハカラハリハルビハル……」

頭を搔き鳩りながら、壊れたおもちゃのようになづく。

幸いにも生き残ることに關してはあの魔法のおかげで、そう難しい

ことではない。

だけど、あれで何処かに逃げ延びたところで、助けを呼んでもコニーさんの命を救うことは出来ないのだ。

正直な話、あの出血の量ではもう助かる見込みはないのかもしれなけれど、そこは異世界人の生命力、そして魔法の力を信じることにしよう。

命の恩人というか、異世界で良くしてくれた人が死んでしまうのはやつぱり嫌なのだ。

「……よし」

決心したように咳きながら、重い腰を上げる。

やつぱり俺が小さな抵抗を続けたところで、奴を倒すことは出来ないし、万が一倒したところでコニーさんの治療が行える訳でもない。村に戻れば、俺の怪我を治してくれた魔法使いがいるはずだ。

とりあえずはその人とさつきの二人にこの場所を教えておくのが、先決なんぢゃないだろうか。

そう思いあの村を脳内で思い浮かべるが、頭に一つの不安がよぎった。

さつきの爆発。

俺はあれをよける事ができたけれど、その近くには血だらけのコニーさんが横たわっていた。

ただでさえ危険な状況、あんな攻撃を食らつていたら、もうひとたまりも無い。

はつと思い立ち、樹の影から慎重に顔を覗かせ様子を伺うと、舞い上がっていた砂埃は晴れ、夜の闇を取り戻していた。

そして、地面には先ほどと一つも変わることの無い、コニーさんが

倒れている。

あんなに大きな爆発で小石や砂も吹き飛ばされていたといったのには、微動だにしていないヨーさんに俺は少しの違和感を抱いた。

そして、突如聞こえる風切り音。
何か来る！

咄嗟の判断で樹の影にしゃがみ込むと、大きな振動と共に美しい月の光が差し込んだ。

何が起きたのか、そう思い顔を上げると今まで隠れていた、過去の俺が両手を回したところで到底届かないような大樹が切り取られ、倒壊していた。

「そこにいたんですか～。流石に便利ですねえ、その魔法」

いつの間に移動したのか、道化師は既に切り株と化した樹の向こうから、こちらを覗き込んでいる。

背後の月明かりにライトアップされ、こちらからは逆光となるその姿はあるでゲームに登場する大魔王のような、そんな圧倒的絶望感を与えた。

「ちょ、ちょっとま、待った！」

震える身体と震える声で、脳内にあの村をイメージするまでの時間稼ぎを試みる。

「……何を待つのでしょうか？」

道化師はおどけた様に首を傾げるが、そんな仕草をしたところで、彼に可愛らしさが付く「されることはない。むしろ狂氣染みたその容姿に、更なる拍車を掛けているだけであった。

「そ、その少し話をしようじゃあ……ないですか

「ふん。隨分と偉そうな物言いですね」

道化師はあからさまな不機嫌さを、顔に浮かべた。
くそ、なんで俺がこんな奴に下手に出なくちゃならないんだ。
そんな屈辱感を感じながらも、それを顔に出さないよう怯えた愛想笑いを貼り付けた。

「じゃ、じゃあその……教えてくれないですかね。貴方の、その、
狙いは何なんでしょうか……？」

目の前の切り株の汚れを払つと、道化師はため息をつき、それに腰をかける。

「……いぐら貴方のような子供といえど、私がそんなことを簡単に教えると思いますか？ それに今のこの状況、どう考へても私の優勢でしょう？ 貴方は逃げることは出来ても、私を殺すことは出来ない」

こちらへと顔を近づけながら、そんな俺が今一番痛感している」とを言つてのけると、奴は俺の首を掴み押し倒した。

落ち着き払つた道化師の声にすっかり油断していた俺はなす術無く、
土の地面へと背中を打ち付ける。
苦しい。

奴の右腕が容赦無く俺の首を締め付けていく。

「ぐあ……」？

窮屈になつた喉から絞り出される呻き声が、まるで警告音のよう
死の近付きを知らせていた。

本当に死ぬ。

焦りながら急いであの村をイメージするが、遠のく意識の中で白く
霞んでいくそれはとても明確なイメージと呼べるものではなかつた。

「ああ、そうだ……」

道化師の声が聞こえ、不意に緩む首への圧迫感に肺へと急速に空氣
が流れ込む。

その勢いに咳き込むと、飛散した唾液を拭う様にしながら道化師は
更なる不快感を示した。

そして俺の頬を軽く叩くと、髪の毛を掴んで強引に前を向かせる。

「貴方が助けを呼びに行つた、という可能性を見逃してましたねえ。
たとえ呼んでもなくとも、時間の問題か……」

思案するように顎に手を当てると、道化師は未だ髪を掴んでいる方
とは別の手で、少し離れた場所にある馬車を指差した。
そうだ、今は誰もが寝静まつてゐる様な真夜中。

あの爆発音を聞けば、せめてあの一人はここにやって来てくれるだ
らう。

ここには少し、派手にやり過ぎたのだ。

「本はあの中にあるのですか?」

道化師もその結論に至つたらしく、少し焦りの表情を浮かべている。そのせいか発言はとても迂闊で、自ら田的を明かしている様なものだった。

今、俺を殺しておけば良かつたのに。

少しだけ、ほんの少しだけこいつに抗うと言つか、一矢報いことができる案が脳内に浮かび、心に希望が芽生えた。

「……何を笑っているのですか」

自然と零れてしまつた笑みに反応し、道化師はもう一度首を締める手に力を込める。
だけどもう遅い。

希望が見えて落ち着いた頭で、先ほど見たばかりの光景をイメージする。

目の前の道化師の顔が次第に薄らいでいき、空間と共にぼろぼろと零れ落ちると、その欠片は新たな景色を持つて俺の周りにはめ込まれていった。

すこし離れたあの村をイメージするには多少の時間が掛かるが、今いる場所のすぐ近く、あの馬車の所ならばすぐ様にイメージを構築することができる。

反抗精神の立ち上がつた頭は恐怖で埋め付くされていた時と比べて、まるで油でも差されたかのようになじーく回転を見せたのだった。

「……よし」

目前の馬車を見上げて移動の成功を確認すると直ぐに立ちあがり、その車輪を掴む。

道化師は多分、まだ俺の居場所を突き止めていないだろ。う。それならば、今の内に奴の目的のものが納められたこの馬車を村へと瞬間移動させれば、奴の目的が達成されることはないのだ。

奴が居る方をちらちらと伺いながら、馬車と俺があの村に居る様を思い浮かべる。

だがしかし、一向に移動の兆候は見られなかつた。

「何でだよ……」

焦燥感に駆られ、疑問の言葉を吐き捨てる。

一体何故移動することが出来ないのか。

再び軋み出した頭で必死に原因を考えると、ある一つの要因が浮かんだ。

「……」「いつが？」

原因と思しき生物に視線を向けると、そいつはこの惨状に怯えることはあっても、決して逃げることなどはしていない。
まるで「主人を心配しているかの様に小さな鳴き声を上げ、震えていた。

この馬、この馬が馬車に繋がれて居るから、移動することが出来ないのか？

そんな、一応納得のできる解答へとたどり着くが、すぐに新たな疑問点が湧き上がってきた。

未だ俺の手の内にある短剣。

この短剣はあるベントさんの手をすり抜けて、俺と一緒に移動することができた。

それならばこの馬車だって、馬を残してあの村へ移動することがで

きるはずだ。

急がなくちゃいけないのに……。

やつぱり悪魔のよく分からぬ力に頼った俺がいけなかつたのか？

そんな後悔とも取れる感情に苛まれていると、まるで蛇に睨まれた蛙の如く

、急な殺氣にあてられ身体がぶるりと震えた。

消去法、いや必然的にその視線の正体はあの道化師だ。

「はやつ……」

俺があいつの手を抜け出して、まだそんなに時間は経っていないと思つたのに。

恐る恐る道化師の方に視線を向けると、奴の鋭い眼光にしつかりと焦点があつた。

遠巻きに佇む道化師は俺の姿を発見すると体ごと振り返り、右腕を天へとかざす。

その行動に俺の焦りはより色濃くなつた。

撃つてくる。

何度目か分からぬあの爆発する光弾を、奴はまた撃つてくるつもりだ。

すぐさまどこかの近場に瞬間移動を試みようとするが、ふとある考えが浮かび、俺はその行動を中止した。

この馬車を盾にすれば、奴は攻撃を仕掛けることが出来ないのではないか。

そんな考えで、俺は道化師へと声を張り上げた。

「ちよっと待つたー！ そ、そんな攻撃したら、この中の本も全部燃えちゃこますよー！」

馬車の車輪をぽんぽんと叩きながらそんな風な忠告をすると、道化師は呆気なく、その右腕を地面へと垂らした。

案外これは話し合いで解決できるかも。

今までの事を考えれば酷く甘い、そんな考えを抱き始めたその瞬間、地を蹴る激しい音が辺りへと響き、厳しい現実を思い出させた。

「ふざけるなふざかるなふざけるな？」

ぞくりと背筋に伝わる汗。

狂った様に叫びながら、狂った様な表情で、狂った様に走り来る道化師の恐怖を駆り立てるその姿に、足がすくんだ。

まずい、何がそこまであいつの怒りに触れてしまったのか。急激な感情の変化に着いていけず、ただ立ち尽くすしかない。

そんな中、少し遠くから声が聞こえてきた。

「おー…… そのダガー貸せ……」

弱々しいながらも、はつきりとした意思を持ったその声は紛れもなく、毎間に聞いたあのロニーさんの声であった。

嬉しさと安心感が込み上げ、そちらへと視線を向ける。

小さな声ではお互いの耳に音が届きそうにないような、数メートル先に倒れるコニーさん。

その姿に少し疑問を抱くが、横たわる周りの地面に、塗りたくられた様に広がる漆黒の闇に気付き、顔を強張らせた。

そうだ。

例え今、コニーさんが生きているとしてもこの重傷では……。

横から迫る鋭い疾走音に怯え、意識を向けながら共に焦りが高まつていく。

「いいから早くしふ？」

間にある距離など関係ないかの如く、はつきりと鮮明に聞こえるコニーさんの声。

そして着実に距離を狭め、近付く道化師。

どっち付かずな視線を宙に這わせ、今現在するべき行動、そしてその矛先を全く定められない。

どうすればいい？

そんな何とも情けない感情に頭を締め付けられ、俺は焦りに負け、やけくそな選択を下した。

解決の糸口を生み出すのを諦め、その役目を他人に委ねたのだ。少し離れた場所に倒れている、血だらけの恩人に。

コニーさんが求めたのは俺の左手に握られたこの短剣。

それを右手へと握り直し、大きく振りかぶる。

回転しながら空中へと飛び出したその凶器は真っ直ぐにコニーさんの元へと進んでいく。

しかし、無我夢中で放り投げたその瞬間に俺はある重大な事に気付いた。

鞘の抜けた刀身は綺麗な月の光を放っている。

これ、刺さつたりしないよな？

自らの手で命の恩人に止めを刺してしまったなんて、笑い話にもならない。

宙に舞う刃をそんな落ち着かない気持ちで見つめていると、もう直ぐ近くまで近づいていた音を思い出した。

そんなところまで来てるのか……！

振り向いたその方向には道化師が、もう十メートル圏内程まで迫っていた。どうにでもなってしまえ。

ここまで命の危機が間近に迫ると、思い浮かぶ言葉はそんな投げやりなものだけであった。

恐怖に腰が抜け、地面に尻餅をつく。

そのどすんとした音と同時に、まるで砂場の山にシャベルを勢いよく刺したような、そんな音が聞こえて来た。

震える唇を噛み締めながらその音がした方向を見ると、今さつき投げたあの短剣がコニーさんの前方、こちら側の地面に突き刺さっていた。

届かなかつた……？

そうだ、今の俺は男子高校生ではなくて幼い少女だ。例え小さな剣だとしても、この身体には重すぎる。

くそっ！ とんだ大失敗だ。

どうすればいい？

そう問う様にコニーさんを見つめると、彼はその血が伝づ顔でにっこり笑つて見せた。

何でこんな時にそんな風に笑つているのか？

今、これからこの道化師に俺たち一人とも殺されてしまうに違いない

いの」「。

何で……。

俺を安心させる為か。

精神的には高校生男子のこの俺も、外から見れば幼い少女。まるで子供をあやすかの様な、策などないそんな笑顔なんだろつ。死の淵に立たされてまでのコニーさんの優しさに、柄にも性別にもなく、不意に涙が零れた。

その現象に、恐怖のせいだと言い訳をしながら、まぶたの裏の暗闇に視線を這わせる。

ああ、家に帰りたかった。

母さん、父さんごめんなさい……。

心の中に遺書を書き、やがて来る苦痛に身体を硬めるが、その行動は両者ともに全くの無意味に終わつたのだった。

瞬間的に差し込んだ淡く翠色の光。

その美しく優しい光に目を開くと、道化師が体勢を崩したのか、あの走り来る猛スピードのまま、俺の横の地面を肩で滑つて行つた。呆然と後ろ手をついたまま、首だけを背後へと捻る。

そこにはやっぱり見間違えではなく、あの道化師が横たわっていた。まさか、怒りに狂い過ぎて石にでもつまづいたのか？

そんな酷く間抜けな光景が頭の中に浮かび、少しの笑みが心に生まれた。

「おい……、やつをヒーリングち来い……」

緊張感の無い茶番を脳内で繰り広げていると、二度聞いたコニーさんの声。

その声に我に帰つた俺は這いするような無様な格好で、そちらへと逃げて行く。

コニーさんは遠くから見ていたよりも酷く、その身から血を滴らせ

ていた。

「だ、大丈夫ですか？」

すがりつく様にそう問うと、コニーさんはまた、先程の様な笑みを浮かべた。

「ああ、俺は大丈夫だ……。それより下がつとけ」

そう言つてコニーさんは片腕で庇つ様に、俺を自分の後ろへと押し退ける。

その行動の真意を汲み取り、倒れた道化師の姿を探る様に見遣ると、奴は既にその身を起き上がらせようとしていた。

何かを庇い、何かを気にしながらのよつなその行動に少しの違和感を感じ、道化師の身体を見回す。

すると、ある一点におかしなものを見つけた。

外側の左くるぶし上辺りに、深々と突き刺さった一本の短剣。

それはどう見ても、先程俺がコニーさんに渡そうとしたあの剣であった。

何であんな所に刺さつているんだ？

そう思い、反射的に本来短剣が刺さつているべき地面を見るが、やはりその姿はなかつた。

瞬間的に移動した剣の謎に、頭を悩ませながら呆然としていると、やがて立ち上がった道化師が口を開いた。

「私としたことが、少し熱くなつてしましましたね」

少しどこかじゃないだろ？

内心でそう思いながらも、もちろんそれを言える様な状況ではなく、ただ事の成り行きをそのまま見守る。

しかしヨーさんはそりではなく、横たわった状態のままで道化師へと言葉を発した。

「少しじゃないだろ？、あんなの。何がそこまで気に障つたんだ？」

声色に警戒の色を匂わせながら、まるで俺の気持ちを代弁した様な問い掛けに道化師は驚きの表情を浮かべた。

「なるほど、まだ生きていたのですか。それじゃあこれも、貴方の仕業ですね？」

そつとひくしゃがみ込み、足に刺さった剣を苦痛の表情を浮かべる事無く、何ともあつたりと引き抜いた。

真紅の血を滴らす刀身とは違い、その傷口からは何故か血が垂れる事はない。

「ああ、そうだ。結構痛かつただろ？、」

肯定の意を示したその答えに、先程の謎が解ける。

あの剣はヨーさんがどうにかして、いや魔法で道化師へと突き刺したのだろう。

「まあ、多少は効きましたが。でも、抵抗もここまでですよ。もつ
村の人間も近付いて来ている。貴方達は今殺しておかなくては……」

道化師は気配を感じていたのか、彼が目線で示す方向にはランプと思しき光がちらちらと揺らめいていた。

ainaさんにベントさんが助けに来てくれた。

そんな希望の心が生まれたのは一瞬、後に続いた言葉に俺は倒れたままのコニーさんの服をぎゅっと握った。

あの二人がここにたどり着くまでに、俺達を殺して逃げることなど、こいつには簡単なことだ。

こちらが対抗できる手段といえば、コニーさんの魔法だけれど、それすらも本人の表情を窺う限り望み薄であった。

形成逆転かと思こきや、全くもって何一つ、状況は逆転などしていなかつたのである。

道化師はゆっくつと、右腕を天にかざした。

「それでは」*きげんよひ*

掌へと光が集まり、まばゆい光弾を形成していく。

その光景に、俺はここにきて何度もになるのか、死を覚悟した。しかし、それもまた恒例の如く杞憂に終わり、俺の命は終わることがなかつたのだった。

道化師の背後から、いななきと共に迫る一頭の馬。

繋がれた馬車が横倒しにならんばかりの勢いでターンし、その前足を容赦なく叩きつけようとする。

「なつ……？」

その声に気付いた道化師は振り返り、それと同時に掌の光も闇に消えていった。

馬の一撃を間一髪でかわすと、道化師は体勢を崩し、地面へと転がる。

そしてそれによつてできた俺たちとの間に、馬は漆黒の体を滑り込ませた。

「……なんですか、この馬は！」

体勢を立て直し、立ち上がった道化師は驚きの声を上げる。しかし、馬の行動は俺にとつても予想外だつた。

この馬は昔コニーさんに助けられたことによつて、恩を感じ、忠誠心を持つてゐる。

もしかしたらそういうことなのかもしれない。

そんなことを考えながら、道化師の様子を探ろうとするが、間に立つ馬車に遮られ、姿を見ることはできなかつた。

「ありがとう……バート」

コニーさんはそう静かに咳き、頭を伏せ、瞳を閉じる。

そしてそれに気付いたのか、名前を呼ばれた馬、バートはじりじりをちらりと見ると、道化師を威嚇する様に鳴き声を上げた。

「馬の分際で……？」

焦りや苛立ち、そんな感情を含んだ声が馬車越しに聞こえ、それと同時に再び強い光が辺りを照らす。

道化師が魔法を放とうとしている。

そんな事実に身構えると、ロニーさんが俺に口を開いた。

「馬車に掴まれ。俺は大丈夫だから」

「でも……」

このままでは、何の役にも立たないくせに、といひ反論をしてしまつ。

「いいから行け！」

しかし強く促すロニーさんに従つてなく、俺は立ち上がつた。

急ぎ足で馬車へと駆け寄り、車輪に足をかけて側面へとしがみ付く。これからどうするのか。

その教えを乞うように後ろを見ると、ロニーさんがそばまで落ちていった石ころを掴み、それをバート田掛けで投げ付けた。

何故？ そんなことを思つ暇もなく鳴き声とともにバートが勢いよく走り出す。

同時に揺れ動く馬車に、俺は必死にしがみ付いた。

少しスピードが乗つた辺りで、バートはアイナさんとベントさんと思しき灯りの方へとターンし、駆けて行く。

これでロニーさんと道化師の間を遮るものは何も無くなつてしまつた。

本人は大丈夫と言つたけれど、一体どうするつもりなのか。

バートは俺が道化師の目に触れないような向きで旋回してくれたので、奴の様子はわからない。

けれど、コニーさんは相も変わらず地面へ伏せつたままだ。この馬車には道化師の目的のものが積まれている。

つまり攻撃は俺ではなく、コニーさんへと向かうのではないか。そんな心配に苛まれつつ、スピードを上げる馬車に、景色が後ろへと流れて行く。

次第に後方に現れた道化師の姿はまた、あの魔法を放とうとするものであった。

「コニーさん危ない！」

思わず飛び出した警告は道化師の耳に届き、渋い表情を浮かべる。

しかし、あの二人の距離ではコニーさんが道化師の動向に気付かない訳がない。

その筈なのにコニーさんは顔を上げる事は無く、一心に地面を見つめていた。

何をやつてるんだ、全然大丈夫じゃないじゃないか。

そんな事を思った矢先、道化師の掌から光が放たれた。

「あつ……」

悲鳴を上げるでもなく、名前を呼ぶでもなく、そんな間抜けな声が自分の口から漏れた。

コニーさんへと着弾した光は煙を巻き起こし、辺りを幕のように覆つていく。

死んでしまったのか、それすらもわからなかつた。

「嘘だろ……」

ぽつりと呟き、未だ実感を持てない怒りをもつて道化師を見ると、その視線が奴の冷たい目にしつかりと重なる。そして、道化師は嫌らしくにっこりと笑い、そのまま闇へと駆けて行つた。

近付く村人の灯りを警戒して退散したのか。
しかしそんな奴を追いかけることは今の俺にはできなかつた。

やがて邪悪な気配の逃走を感じ取つたのか、バートは落ち着きを取り戻し、スピードを緩め、立ち止まつた。

馬車から飛び降り、土の地面を踏みしめると、直ぐにコーネーさんの元を見る。

未だ立ち込める煙は奇妙な渦を描き、星が瞬く空へと巻つていた。そんな煙の妙な動きに違和感を持ちながらも、のし掛かる驚きと悲しみに足が動かない。

すると不意に背後を灯りが照らし、声が聞こえた。

「大丈夫？」

振り返るとそこには慌てた様子のアイナさん、そして泣い顔をしたベントさんが佇んでいた。

13・離れの魔術師

アイナさんは足早に一歩一歩と駆け寄ると、地面に膝を付き、目線を俺と同じ高さまで合わせる。

右手に握られたランタンが照らすその表情は心配と焦りに溢っていた。
コニーさんの危機だからというのが大半の理由なのかも知れないけれど、見ず知らずの俺にまでそんな視線を向けるなんて、きっとこの人もいい人なんだろう。
そんなことを改めて思った。

「怪我はない？」

ランタンを地面へと置き、空いた手を俺の肩に置くアイナさん。言われて自らの体を見回すが、そこには少しの擦り傷と最早意味を成していない三角巾が、ぶらぶらとぶら下がっているだけだった。思い出してみると、狼に噛まれたこの右腕、道化師と対峙していた時は痛みをあまり感じなかつた気がする。

「えっと、大丈夫です。それより……」

大きな新しい怪我も無く、とりあえずの無事を知らせると、問題は俺の方では無い。

目線で彼の場所を知らせると、アイナさんは急いで立ち上がった。

「ベント、この子をお願いね」

俺の面倒を任せられたベントさんはより一層の不快感を露わにする。そこまで露骨に表情に出されると、じきじきまで嫌な気持ちになってしまひ。

倒れているコニーさんの元へと走るアイナさんを見ながら、俺の心はまた更に沈んだ。

「あの……私たちも行きましょう」

少しばかり慣れてきた一人称でそう告げると、ベントさんは無言で頷き、アイナさんを追つて歩を進めた。
それに続き俺もコニーさんとの距離を詰めて行く。
すると前方から、先に辿り着いたアイナさんの声が聞こえてきた。

「だ、大丈夫ですか？ 師匠？」

地面上に膝を付き、すがる様に問うアイナさん。

煙が晴れたその場所にはまた、変わらぬ姿のコニーさんが血だらけで横たわっていた。

「なつ……？」

その姿を視認したベントさんは堪らず声を上げる。
まさかここまで事になつてゐるとは思つていなかつたのだらつ。
魔術師嫌いとは言え、流石に動搖したのか。

「大丈夫ですか？」

アイナさんの再びの問いに、コニーさんは身じろぎで答えた。
言葉を発する事が出来ないのか、それともその行動 자체が辛いのか。

どちらかは分からずとも、あまり良い兆候だとは思えない。
けれど、未だコニーさんは生きている。

それが分かつただけでも、全身から力が抜けて行くのを感じた。

「ああ、そうだ……ち、治療をしなくちゃ……」

アイナさんもコニーさんの動きに安心したのか、次の手に出ようと
するけれど、その声は未だ震えている。

それに治療と言つても彼女、この場に持つてきているのはたった一
つのランタンだけで、道中身を守るものでさえ、ベントさんがいる
せいが手にしている様には見えない。

道具もないのにどうやって治療するのだ？

「えつと……緑豊かな草原、だけ?

通る湖だつたかな? ああ……ええと……」

いや、透き

少しの心配を帯びた視線でそんなアイナさんを見つめていると、地
面へと膝を付いたまま、呪文の様に言葉をぶつぶつと吐き出し始め
た。

一体何を呟いているのか、理解は追い付かない。

「あ、そうだ……。よしー」

思案する様な言葉を紡ぐのを止め、自らの頬を打ち土氣を高めんとするアイナさん。

その瞬間周りの空気が一変した様な気がした。

「うわ……」

身体へと感じる妙な感覚に、思わず声が漏れる。

しかし場の雰囲気とともに、それは決して邪悪に感じるものでは無く、むしろ心地良いものであった。

心の底の方から静かに沸き起こる優しい風に身を任せ、様子の変わったアイナさんを見つめる。

膝の上へと置いていた拳を解き、掌をコニーさんの身体へとかざすと、その手は淡く白い光を放ち始めた。

頭から爪先まで、そのまま掌を移動させて行くと、青白かったコニーさんの皮膚が健康的な血色を取り戻す。

そして一通りの治療が終わったのか、アイナさんは疲れた様に地面へと尻餅を付いた。

「あ、あの……コニーさんはもう、大丈夫なんですか？」

タイミングを見計らつた様に、恐る恐る言葉を投げ掛ける。アイナさんの表情、そしてコニーさんの様子をとつて見ても、多分治療は無事に終わつたんだろうけれど、確証を得られなければどうにも安心出来ない。

「…………うん、大丈夫よ。私は回復魔法には自信があるの」

そつと笑顔を見せるアイナさんに俺もまた、身体の強張りが解けたような気がした。

それにしても……。

魔法とはここまでに便利なものなのか。

コーネさんが使っていたのはよく分からぬけれど、少なくとも回復魔法ではなかつた筈。

その便利さと共に、アイナさんが魔法使いであつたところもまた驚きだ。

「おー、アイナ」

物思いに耽つていると、隣に立つベントさんからそんな言葉が飛び出す。

比較的乱暴な物言いでそちらを見ると、その表情は何とも不機嫌そうなものだった。

「お前は魔法使いじゃあなくて治術師なんだ。それと、終わつたらもう行くな」

まだ。

さつき助けを求めて行つた時も、こんなような訂正をしていたはず。口調もなんか怒つているみたいだし、そんなに気になるのだろうか。

「またそんな事言つて、私は魔法使いよ。それと、とりあえずあの馬車に運ぶから手伝つて」

そしてまた例によつてアイナさんの訂正。

あしらう様な言葉にベントわんは少しムツとするが、渋々コニーを
んを運ぶのを手伝つ。

地面へとしゃがみ込み、おんぶのよつた体勢でコニーさんを背負お
うとする様だ。

やつぱり外見的にもがたいがいいし、大人の男性だとしても人を一
人背負うぐらい簡単なんだろうか。

地面に寝たコニーさんをアイナさんがゆつくりと起しつゝ、ベントさ
んくと預けようとする。

しかしその瞬間、今まで少しあか動かなかつたコニーさんが、自ら
の意思で向けられたベントさんの背中を拒んだ。

「あつ、師匠！ 気付きましたか？」

その動きに気付いたアイナさんが声を掛けると、コニーさんはゆつ
くつと
立ち上がつた。

「駄目ですよ師匠！ まだ安静にしてなこと！」

ふらふらと立ち上がつたコニーさん、アイナさんが座る様に促す。
確かにその様子、まだあまり具合が良くなさそうだった。

「何だ、ペンペンしてんじゃねえか」

一体ペンペンを見たからこいつ風に見えるのか。

まあ、ベントやんにとつて照れ隠し的なあれかもしれないけれど。
しかしコニーさん、アイナさんにもベントさんにも何も返事を返さ
ないところが少し心配だ。

しかしそれも、直ぐに覆されたこととなつたのだけれど。

「ああ、死ぬかと思った……」

緊張感のない声でそう漏らし、勢い良く地面へと尻餅をついて様に座
り込む。

「流石に少し調子に乗っていたかも知れないな」

言いながら背後の柔らかい草の地面へとその身を投げ出し、『うん
』と仰向けに寝転ぶコニーさん。

年甲斐に無くなにやつてんだとか、一回立つたのはなんだつたのと
か、色々思うところはあるけれど、俺の命の恩人だ、無事回復して
よかつた……。

「おおアイナ、来てくれたのか。助かつたよ」

田線だけをそむけた向か、にこやかに笑うヒトの視線を隣のベント
さんへと移す。

「それと一応お前にも礼を言わなきゃな。えつーと……名前はまあ、
あれだけど、とにかくありがとな」

絶対忘れてはいるなベントさんの名前。

まあ、忘れられた本人も怒るでもなく微妙な表情をしているから、面倒なことにはならなそうだけど。

「でもまあ、良かつたですよ。師匠が野盗にやられたって聞いたときは、ほんとビックリしたんですから」

「野盗？」と一瞬疑問が湧くが、思い出してみれば俺がこの一人にそう伝えたのだった。
しかし「二」さんはそんなことを知らず、怪訝そうな表情を浮かべている。
察してくれ、そう祈るしかない。

「えーっと…… そつ、野盗だよ野盗、うん」

そんな祈りが届いたのか、「二」さんは俺の顔をチラリと見ると、事態を把握した様にそう言つた。

「しつかし、魔法が使える癖にそいつら辺の賊にやられるたあ、だつせーなあ」

そんな風に安心したのも束の間、今度はベントさんからの喧嘩をする様な発言。
この人は怪我人相手になにやってんだか。

「お？ なんとか君、随分と挑発的だねえ。昼間の口論の続きでも

したいのか？」

「ニーさんもニーさんだ。

まあ、茶化すよつた言葉のおかげでベントさんもアイナさんもこれ以上その事について追求はしなさそうだけど。でも、喧嘩にはなるかもしけないな。

ベントさんおでこに青スジたててるし。

「まあまあ、一人とも落ち着いて。とりあえず村に帰りましょ？
話はそれからで……ね？」

間へと割って入ったアイナさんが一人、といつかベントさんを上手く宥めると、村への帰還を提案する。
だがしかし、それに意を唱えたのは紛れもない「ニーさん」であった。

「ああ、俺とあいつは村へは帰らないんだ。悪いけどな」

今まで会話から完全に外され、蚊帳の外だつた俺を指差し、ニーさんはそつ言つてのける。

それに動搖したのはもちろん、弟子であるアイナさんだった。

「…………えつと、どうこうことですか？ 師匠……」

「…………うう」とつて言つかなあー。まあ、そつこう運命だった、て
いう感じで

「ニーさんは思案する様に頭を搔きながら言つ。

その真剣味のなさが気に障ったのか、アイナさんは少し語調を強める。

「眞面目に説明して下さい。」

「ああ、すまん……。ちょっとこっち来い」

そんなアイナさんの台詞にヨーちゃんもしつかりと説明をする気になつたのか、手招きで俺を呼び寄せる。

ヨーさんが村を出て行くはつきりとした理由は俺も気にならぬといふではあるし、素直にそれに従つた。

「まあ、長くなるから搔い摘んで話すけど、この子はな……」

ヨーさんは優しく、俺の頭へと手を置く。
そしてアイナさん達一人だけではなく、俺自身にとっても酷く衝撃的な発言をした。

「俺の娘なんだよ」

そんな風に妄言を吐き出したのだ。
何言つてゐるんだこの人は。

静寂の音が、林の暗闇にこだましたような気がした。

「……えっと、ちょっと待つてくださいよ師匠。今朝私が治療したこの子が師匠のお子さんだと……？」

大きな瞳を真ん丸と見開いたアイナさんの問いに、躊躇つ間もなくコニーさんは頷く。

いや、ちょっと待ておかしい。

俺にはことは違う世界にちゃんと親兄弟がいるんだから、それはおかしいだろ？

何を勝手に得の無いホラを吹いているんだ。

「ええと、ちょっと頭が混乱してるのでその話は置いときましょう……。私が質問した事の答えではありませんし」

いや、個人的には置いといてもらっちゃあ困るんだけど。

ここで誤解を解かないと後に絶対面倒臭い事になるに決まっている。だけどアイナさんはそのまま言葉を続けた。

「さつき私が質問したのは村に帰らないうつのはじつこととか、ですよ師匠。話はそれからですか？」

俺が口を挟む間もなく、そう捲くしたてる。

なんて言つか、切り替えの早い人だ。

そんな感想を心中で述べ、半ば場の空氣に流される様に静観していると、ちゃんと肩を突かれた。

「いいか、取り敢えず俺に話を合わせる。悪いようにはしない、い

いな？」

そんな感じではなく悪役臭い台詞を放ったのはローラーさん。このなんとも胡散臭い誘い、果たして乗るべきなのか。

「どうかしましたか？ 師匠？」

「ん？ ああ、何でもないわ」

怪しむアイナさん」そう叫びるローラーさん。

そして、その横でうんうんと頭を悩ませる俺。

ここで俺自身がローラーさんの娘である」とを否定したら、一から素性を明かすことをしなくてはならない。

だけど、違う世界から来たっていう事実を隠して説明するのを前提としたら、話せる事は限られてくる。

それに話術がある人ならばともかく、俺なんかじゃあ絶対にビックリでボロが出るはずだ。

ただでさえ隠し事で精一杯なのだから。

「それじゃ、説明してください。師匠」

ある種の決意を固めた俺の真横で、ローラーさんはゆっくりと口を開く。

「じゃあまず、俺の奥さんが死んでるってのは知ってるか？」

そう言ってあからさまに心痛な顔をするローラーさん。

俺の母親となる人物まででっちら上げるつもりなのだろうか。

「えっと……師匠、『結婚なさってたんですね……。初耳です』

驚いたアイナさんとは違い、ベントさんは眉をピクリとも動かさず無関心無表情を貫いている。

そんな彼に少しの感心を抱きながらも、ニーさんの嘘とも本当とも取れる話へと耳を傾けた。

「まあ、お前が産まれる少し前に死んじまつたからな。知らないのも当然だ」

そこで一呼吸置き、ニーさんは考え込むように頭を搔いた。

この様子じゃあ、色々と嘘の話を必死で考えてる最中なかもしない。

まあ、今の俺には助け舟を出す事はできないけれど。

と、そんな歯痒さのままに各自の表情を伺うと、ベントさんの眉がぴくりと動き、その顔がゆがんだように見えた。

まあ、何を言つわけでもないみたいなので、気のせいなのかもしない。

「……だけどな、その死んだって

いつのせどりやら俺の勘違いだったらしいんだよな

なんか急展開だ。

さつきの発言に不味いところでもあって、軌道修正に取り掛かった

のだろうか。

「勘違い……ですか？」

「そり、勘違い。もしかしたらあいつは生きてるかも知れない……。
だから探しに行こう、って訳だ。俺とこにいつでな」

そつ言つて俺の頭へと手を置き、乱暴に撫でて見せる。
ただでさえくしゃくしゃの髪が更に乱れ、鬱陶しさが増す。
亡くなつたはずの妻を探すための親子旅。
ヨーさんはそれを村を離れる理由にするつもりみたいだ。

「話は……わかりました。でも師匠、いくつか質問してもいいですか？」

アイナさんは無理矢理に納得したようで、そこから湧いた疑問を投げ掛ける。

「師匠が奥さんを探しに行く、っていうのは分かつたんですけど、
その子は今まで村では見かけませんでしたし、師匠の家にも居ませ
んでしたよね？ 今までどこにいたんですか？」

話の隙に鋭く突っ込んだ質問に、ヨーさんの動きが石のように固
まってしまった。

さつきまで顔に浮かんでいたへらへら笑いは見る影もなく、額に冷
や汗をかいている。

一体どんだけ焦ってるんだよ。

計画的じゃなく、その場のノリで物事を進めるからこんな事になるんだ。

命の恩人でありながら、戦闘以外ではイママイチ頼りないコーナーさんを少し呆れた視線で見つめると、それに気付いたのかこちらへと助けを求めるような瞳を向けてきた。

「……」

俺は溜息を吐き、口を開いた。

「あ、あのそれは私が説明します……はい」

やつぱり相変わらず人と話すのは苦手で、口調は何だか弱々しい。自分のことながら情けないけれど、アイナさんは恐らく男の時の俺と同じくらいの歳、緊張するのも無理はないんじゃないだろうか。同年代の女性って訳だし。

と、渋々説明を始めるために脳をフル回転させていると、もつ牒ることはないんじやないかと思つ程に黙りこなっていたベントさんが、久し振りに口を開いた。

「その前にひつといいか？」

淡々と感情を乗せずには発せられたその声に、俺の心が少し後ずさる。口を開いたと思えばこの威圧的な態度、ベントさん一体何を言つつもりなのか。

「あ、はい……どうぞ」

「アイナが生まれる少し前に、じじいの奥さんが死んだって言ったよな？」

その問いに恐る恐る頷き、言葉を促す。
しかしそれに答えた言葉は俺とヨニーさんにとって、何とも嫌なものであった。

「でも、それじゃあ計算が合わねえよなあ。お前そんなちつこ見
た目で、実はアイナより年上ですってか？」

あ、やばい。

一瞬見ただけだから定かではないけれど恐らく、今の俺の身体は少
なくとも中学生……いや、小学生程なのだ。

そんな風に思つたと同時に、背中へと冷や汗がつた。

ヨニーさんへと批判の目線を惜しげも無く送ると、必死に取り繕う
よつて彼は弁明を始めた。

「んーまあ、だからな……つまり、その……」

何とも歯切れの悪い言葉を繰り返し、中々言葉を捻り出せないでい
るヨニーさん。

しかし助け舟を出さうにも、俺だっていい考えが浮かんでいるわけ
ではない。

全く持つて、面倒で大変な事態だ。

ベントをとるアイナさんの顔はどうぞんと険しくなっていく。

「ああ、へやー。」

強く吐き捨てられた声とともに、辺りの空気が一変した。
また魔法か？ 直感的にそう感じたが、この状況でのその選択の真意が図れない。

すると張り詰めた空気が和らぎ、緩やかな風が吹き始める。
その流れの中に、まるで蝶の鱗粉の様な光輝くものが見えた気がした。

「……あれ？」

その幻覚とも取れる何かに目を奪われていると、アイナさんのそんな声が聞こえた。

何かと思いそちらを向くと、まるで支えを失ったかのように彼女は地面へとへたり込んでいた。

「お、おーー、どうしたアイナー！」

すぐさまに駆け寄り、心配気な声を掛けるベントさん。

一体どうしたのか、俺は呆気にとられることしかできない。

乱暴に揺する手を止め、ベントさんは安心した様に息を漏らした。
未だ倒れたままのアイナさんを見て何かに気づいたのだろうか。

「……じじー、これお前がやつたんだろ？」

「ん、ああそうだ」

鋭く刺さる視線を物ともせずに、ニーさんは答えた。

「お前何やつてんだ？ 今度こそちゃんと説明しろ？ 意味わからんねえんだよ？」

魔法らしきものは幻覚ではなかつたみたいだ。

そしてその返答を聞いた途端、ベントさんは物凄い勢いでニーさんへ詰め寄つた。

「お前何やつてんだ？ 今度こそちゃんと説明しろ？ 意味わからんねえんだよ？」

つるぎやくよつた大声に堪らず両手で耳を塞いだ。
襟首を掴まれ、ガクガクと揺られたがりニーさんも堪らずに両手でそれを制す。

「落ち着けって！ お前の察しが悪いから」ことになつたんだ
うつが！」

何ともよく分からぬ理屈をぶつけるニーさん。

元はと言えば彼が練りもしない嘘で場を切り抜けようとしたから、
こんなことになつたのではなかつたのか。

命の恩人としても、擁護し難い。

「はあ？ どうこいつ意味だよ？」

「だから、俺はアイナに撃を隠しつつ村を抜け出そうとしたんだ
よー。どう考えたつてそういう事だらうが。……つたべ」

撃？

そう言えば村を出て行く理由をしつかりと聞いていなかつたけど、その撻とやらが動機なのか。

小さな村に独自の撻、何ともありがちだ。

「撻？　あ、あの撻のことか？」

「……やうだよ」

素つ氣無い返事に、ベントさんは決まりの悪いような顔で眉をひそめた。

「そんなの言わなきやわからんねえだろ？　が、お前がちやんと説明してたら俺だつてどうにかできたださ？」

「……説明したらつて、アイナのいる場でアイナにばれないようにじつやつて説明するんだよ？」

「そんなの魔法とかでどうにかできんだり？」

「魔法なんか使つたらアイナに氣付かれるだろ？　が、あいつだつて魔法使いなんだ。……これだからバカは」

少しずつ幼稚にヒートアップしていく二人の言い争い。
完全に置いてきぼりをくらつてしまつた。

下手したら一回いくらいこ年齢の違う相手に、一体なにをやつしているのかこのおじさんよ。

これはそろそろ仲裁に入ったほうがいいかもしれない。

「あ、あの、それよりアイナさんは大丈夫なんですかね？　ずっと倒れたままですけど……」

タイミングを見計らいそう問うと、未だ首根っこを掴まれたままのロニーさんが疲れたような顔だけをこちらへと向けた。

「ああ、死んじゃいねえよ。ただ寝てるだけだ」

死ぬつて……

そりやさすがにこっちも殺したとは思っていない。
まあ、それでも寝てるだけなら取り敢えず心配はいらないみたいだ。
一人から隠し事をされてるってのは可哀想だけれど。

「というわけで、俺達は旅に出る。お前はアイナを村まで運んで、
適当に誤魔化しておけよ」

ベントさんを押しのけ立ち上がりながら、ロニーさんはそう告げた。
もちろん様々な反論が飛んできていたけれど、まるで聞こえていない
いかのようだ、ロニーさんはこちらへと歩み寄る。

「ちよっとばかり油断しそぎてた。すまん、悪かった」

俺の頭をくしゃくしゃと撫でながら小声でそう言つた。
素直な謝罪に少し拍子抜けしながらも、自然と笑みが零れた。

「おこ、ベント。ひとつ危険な感じになってきたからな、その剣一本くれ」

無視された怒りから再び掘みかかれていたベントをさし、そ
うぴしゃっと言つてのける。

旅の途中の武器にでもするつもりなのだから。しかし、こゝら魔法が使えるとはこゝえ、剣の一本くらい持つてきておくべきじやなかつたのか。

腰に差さつている短いナイフだけでは心許ない。

「なんで俺がじじこに剣をやらなきゃなんねえんだよ」

案の定ただでは渡さないベントさん。

「——さんは予測していたのか、ため息を一つつぶすべく言葉を返した。

「頼む。やうしてくれば俺はもう、あの村には帰らない

「だからひになん……」

言葉を遮り、——さんは語氣を強める。

「魔法使ひはもつあるの村には寄り付かない

「どうこいつことなのか。

俺には分からぬけれど、その言葉を聞くや否やベントさんは泣き、自らの剣の一一本の内一本を差し出した。しっかりとそれを受け取り礼を言つ。

「……じゃあな、一度とくんじゃねえぞ

ベントさんはそう言つと、アイナさんを抱き上げ村へと帰つて行つてしまつた。

残されたのは俺達一人と、闇の静寂。

「それじゃあ、行くか。今度は大丈夫だ」

剣を腰へと納め馬車へと歩き出す。

俺は返事をすると静かにその後を負つた。

色々といつたが解決していらない様な気がするけれど、俺は再びあの馬車に揺られていた。

出来るだけ奥の御者席近くに陣取り、数ある本を防護壁に要塞を築く。

出発直後は道化師の影に怯え、警戒していた俺たちも今は少しばかりの落ち着きを取り戻していた。

最も剣を手にしてから何故か強気になつたコニーさんとは違つて、俺はまだヒビつていてるけど。

しかし、本を動かしたせいか随分と埃っぽくなつてしまつた。喘息持ちではなくて本当に良かつた。

一息つき、壁へと寄りかかる。

どうしてか流されるがままに命の危機を経験したら、異世界を旅することになつてしまつた。

まるで現実ではない様な感覚が何とも気持ちが悪い。未だ原理もなにも分からないとはいっても、なんだか不思議な力まで手に入れてしまつたみたいだし。

「コニーさん、その色々聞きたいことがあるんですけど」

「なんだ?」

考え、警戒することにも疲れ、いくつかの謎の解決を田指し質問をしてみることにした。まづはやつぱり、あの道化師。

「やつらの道化師はコニーさんはお知り合いでですか？」

絶対にそんな訳はないけれど、つまご言葉が見つからずそのままストレートに問う。

案の定コニーさんは苦笑いを浮かべた。

「やつを見えたか？」

「いや、見えませんでしたけど……」

何だか可笑しく、こちらも乾いた笑いを返す。するとコニーさんは奴の話題から俺の話題へ、いつ頃葉をつなげた。

「どうちかってこいつと俺はお前と関係のある奴だと思つてたんだけどな。あいつに追われてお前は村にやつてきた、とか思つてたんだぜ？」

馬の手綱を握りながら、こちらへとちらりと目線を送る。
そうか、コニーさんにとつては俺だつて素性が知れない奴。
そういう考えが自然なのかもしれない。

「いや、私もあの人とは初対面ですよ。命を狙われる理由だつて心当たりはありません」

「ま、そつだろ？な」

一応、道化師との関係はきっぱりと否定しておく。

しかしこれで、俺達一人ともあいつとの関わりは全くないといつ訳だ。

こちらが知らないだけで一方的な恨みを向けられているのだとしても、俺はこの世界に来てから大したことはない。

そうなると必然的にロニーさんが恨まれてる、ってことになるけど、それもやっぱりなんか違うような。

うんうんと頭を悩ませていると、再びロニーさんが声をかけてきた。

「でも、やつするとよ、もう一度聞くがお前は何である村に来たんだ？　あそこ近くには別の村も町もないし、迷子つて訳でもないんだろ？」

しまった。

俺は小さくため息を着くと、少しの熱を帯びた額に手を当てた。またしてもでっちら上りなくてはならない事柄がでてきました。頭の回転にあまり自身のない俺は言葉を紡げずに口ごもる。焦りから出る冷や汗が手の平を湿らせ、更なる混乱を招いた。

「まあ、また後回しでもいいさ。事情なんてそれぞれるもあるもんだしな。いつかまた聞く事にするよ」

もつ本物の事を言つてしまおつかと思つたその時に、降り掛かった声。

思考から開放され、俺は腕をだらりと投げだした。

深く追求されなくて良かった、その安堵感が全身を包んだ。

「だけ次に三つの質問にはしっかりと答えてもらひからな

しかし安心も束の間、コニーさんはそんな事を意気揚々と、何とも楽しそうに言ってのけた。

そして俺の返事を聞く間もなく、その質問は開始された。

「まず、その一。これは最重要事項。今まで聞かなかつたのが不思議なくらいだ。お前の名前は？」

簡単に答えられる質問よ来い！

そう祈つていたが、どうやら通じなかつたようだ。

柏木正一、そう答えれば簡単だけれど今のこの姿には似つかわない。

とこりかこの世界 자체にござつたつて馴染める訳がない名前だ。またもやえーとかあーとか、場繋ぎの言葉でお茶を濁すと、コニーさんは呆れたようなため息を着いた。

「名前ぐらいは答えられるだらう……。まあいい、じゃあそれは後回しだ。その二、お前の年齢は？」

これまた元の世界にいた時のプロフィールでは通じない。だけど先程の質問よりはいくらか答えやすいものだ。

この質問には切り札がある！
俺は自信満々に言葉を返す。

「いくつに見えますか？」

そう、この言葉だ。

これを言つてしまえば自動的に、相手が俺の外見に相応しい年齢を導き出してくれる！

質問にちゃんと答えを返せたのが久しぶりで、俺は「ニヤニヤ」と気持ちの悪い笑みを浮かべた。

「ああ？……まあそうだな、言動はちょっとませてるナゾ、ほんあれだ、9歳だ9歳。そんぐらいだろう？」

よしやつた！

今の俺の容姿から見てどうやらそれくらいが妥当みたいだ。
この体になつてから初の個人情報を手に入れ、小さくガツッポーズをする。

と、同時にそれほど外見年齢が下がつてしまつたという事実に、少しの悲しみを覚えた。

「はい！　じゃあそれでお願ひします！」

「なんか急にえらく元気になつたな……。よし、じゃあその二、最後の質問だ。好きな食べ物は？」

どこから来たのか、とかその類のものが来ると思つていた俺はその質問に拍子抜けをした。
まあ、答えやすいものであるから構わないんだけど。

「えーっと、好きな食べ物はうどんです」

正直に答えるが、言葉を発した瞬間にふと気がつく。
あれ、もしかしなくてもこの世界にはうどんなんてないだろ？
あ、しまった。

「うどん？ なんだそりや？」

「ああ、いやえーっと、あれです、ほら！ 麺的な奴ですよ！ こ
う、麺的な！ 私の故郷の料理なんですけどね！」

慌てて取り繕い郷土料理的なものに仕立て上げる。
それが功を奏したのか、ローラーさんはさして興味もなさげに「な
るほど」と呟いた。

「まあ、それは置いておいてだ。名前の質問に戻るぞ」

「戻るのかよ。

ローラーさんは出でずとも、ローラーさんに見えていないのをいい方に、露骨
な渋い表情をした。

「事情は知らんが名前を明かしたくないってのはわかった。だけど
街までの旅の間、お前は俺の娘という事になる訳だか……」

「えー、その嘘まだ続くんですか？」

堪らずに言葉を上書きすると、ローラーさんは当然だろと言わんばかりの声色で、肯定の意を示した。

「セレヒでだ、俺がお前の名前を考えてやる。所謂偽名つりやつだな

何とも勝手なことだけれど、これは俺にとっては有難い。

一つ目の個人情報ゲットのチャンスなのだ。

うどんを入れれば三つだけだ。

「……あ、じゃあお願ひします」

あまり乗り気なのも癪なので、渋々といった演技を施す。

背中越しに見える首が満足気に頷き、いよいよ俺の名前が発表されてしまつ。

頭の中で、ドラムロールが鳴った気がした。

「ノーラ。今日からお前はノーラ・ブラントだ!」

いい名前……なのか……?

少なくともすぐ変な名前ではないけれど、何とも反応が難しい。
それを感じ取つたのか、ロニーさんはむすつとした顔をこぢりへと
向けた。

「なんだ? おい、反応が薄いぞ?」

「……まあ、いいんじゃないですかね。それで

とはいって、別に否定する理由もない。

素直に受け入れる事とする。

これで、名前や歳くらいなら聞かれても問題なくなつたのだ。
出身とかだって、『一』さんの娘といつ事ならまだいいでもなるだ
うひ。

「じゃあ、それで決定だな」

嬉々と返事をして、馬を操るのに意識を向ける。
それにしてもなんで、こんなにも親子の設定を『一』さんは引きず
ついているのだろう。

ainaさん達の前でなら、不審人物である俺を庇ってくれたとい
う事で一応説明がつくけれど、街へ行く間であれば別にこの設定は必
要がないのではないか。

まあ、念の為とこう事かもしけないけれど。

「とこいつ駄で話はもうこじらせて、お前はもう寝とけ。疲れ
ただろう?」

そう言われて思い出す、確かに眠い。

だけど、もつと疲れているだろう『一』さんを放つて俺だけ寝ても
いいものか?

「いや、その確かに眠いですけど、あの道化師がまたやつて来るか
もしれないですし……」「……

「ああ、もうその辺にこじては心配こりないぜ。この俺が剣を手に取つたんだ、もう不覚はどうねえよ」

そう自信満々に言つてのける。

またまたよく分からぬ理屈だ。

ヨニーさんは魔術師なんだうじ、魔法のほづが得意なんじやないだろうか。

剣を持つて戦う姿を想像できぬまことに貧弱な体をしている訳でもないけれど、やっぱり魔術師が肉弾戦を繰り広げるのはイメージし辛い。

しかし、反論しようとする俺の言葉を聞く前に、ヨニーさんが口を開いた。

「それに万が一、万が一にでも俺が負けるような事があつてもだ。時間稼ぎすらできないほど俺はやわじやない。その隙にお前はへんてこな魔法で逃げればいい。だろ?」

へんてこな魔法。

そう言われて、一瞬頭の中に疑問が浮かぶが、すぐに思い当たる。悪魔から押し付けられたであろう、あの謎の瞬間移動魔法だ。

そうか、あの戦いの中でヨニーさんも俺がそれを使う瞬間を田の当たりにしていたのか。

話を切り出してこなこというからみて、田撃はしていないのかと思つていたけれど。

「ああ、でもあれは不確定要素というかなんといつか……。私もまだよく理解してないっていう感じでして……」

「話はいいが、やつはただのやつ。子供はもう寝とけ」

話を遮られたその瞬間。

ゆっくりとまどろみが加速していく。

眠い、果てしなく眠い。

まぶたは俺の意識と切り離され、自動的に閉じていく。

「おやすみ」最後に聞こえたのはその言葉であった。

そしてそこから目覚めた時、もつ太陽は空高く天辺にあがっていたのだった。

まるで漫画やアニメの様な小鳥のさえずり。

差し込む光が眩しく、ゆっくりと目を開くと、明かりに照らされた埃が鼻をくすぐった。

起爆剤となつたそれが盛大なくしゃみを引き起こすと、更に埃が舞う。

これでは悪循環、負のスパイラルだ。

俺は寝ぼけ眼で本の要塞を崩すと、重い身体を引きずり馬車の外へと這い出した。

「おひ、やつと起きたか

そこにいたのは焚き火跡らしきものの周りに座るヒーさんだった。俺はその姿を渋い顔で睨み付ける。

「……」「——さん、昨日のあれ。催眠的な魔法ですかね？」アイナ
さんを使つたのと回じよつな

「ああ、そうだ。ぐつすり眠れただろう?」

まるで悪びれる様子などない。

「——は一つ、あっぱりと言つておいたほうがいいだらう。

「まあ、それは否定しません。けど、勝手に魔法かけるのやめても
らえませんか？あまりいい気分はしません」

「ああ、すまん。以後気を付ける」

返答に改善の兆しが見出せず、俺はため息を着いた。
まあ、とうあえずそれは置いておくとして、——は一体どこのだ
らうか。

そう思い切りを見回すが、昨日からずっと見続いている森として
変わりがない。

「あの、向かっている街にはもう結構近付いてるんですか？」

「いや、まだまだだな。取り敢えず街道には今流できそうだから、
そこを辿つて行くと後一週間くらいだな」

そんなに掛かるのか。

ちょっと隣町へ行くみたいな感覚で、下手すりや一日も掛からずこ
着くのかと思っていた。

……あれ？ でもこの世界の一週間は果たして七日なのか。

「変な質問かもしけませんけど…… 一週間って何日ですか？」

「アリヤ 七日に決まつてんだが！」

一週間はこの世界でも七日か……。

静かに落胆の表情を浮かべると、ヒーちゃんは直ぐそれに気付いた。

「なんだ？ 不満か？」

首を横に振り否定するが、ビーハヤウ先を急いでるのかと勘違いされてしまつたらしい。

「まあ、街道をそれればもつと早く着くけどな。それじゃあ魔物にも襲われるわ、そこら辺の野生動物にも襲われるわでめんどくさい事になるだい？」

魔物。

さらつとカミングアウトされたその言葉。

だいたい予想はしていた、けれどやつぱりそんなものがいるとなると、途中あの道化師だけでなくそこいつらまで仮にしなくてはならない。

ああ、もう、命を脅かすもの達のオンパレードではないか。

「いや、ここんです……。そのまま街道を這つてください」

力無くやつ返すと、ヨーちゃんは少し不思議そうな顔をしていた。
とりあえず、この落ち込んだ気分をどうにかしよう。
そう思い、何か氣を紛らわせるものを探すと、ある欲求に気が付いた。

その欲求へと意識を向け、手の平でお腹を撫でる。

そう、腹が減ったのだ。

思えば相当長い間、食べ物を口にしていない。

これでは魔物に出会う前に生き絶えてしまつではないか。

「あの…… ヨーちゃん。色々良くして頂いている身で申し訳ないんですけど、その……お腹が空きました」

非常に低姿勢で懇願するよつよつよつと、それをおふざけと感じ取つたのか、ヨーちゃんの表情が和らいだ。

別にふざけたつもりはなかつたけれど、少しやりすぎたか。

「まあ、やつだらうな。昨日からなんも食つてないんだろ？ ほら
よ

ヨーさんは傍から何かを取り出すと、それをこちらへと放り投げた。

とつさの事にかるづじて受け止めると、休む間もなく、また一つ何かが飛んできた。

そちらも俺にしては脅威の反射神経でなんとか受け止める。

やつと落ち着き手元を見ると、それは二つともやはり食べ物であるようだった。

一つは焦げ茶色をした、何とも堅そうなパンらしきもの。

そしてもう一つはカラッカラに干からびた、干し肉と思しきもので
あった。

やつぱりこの世界、旅の食糧といえばこんなものなのだね。

一つ礼を言つと俺は馬車の縁に腰を掛け、足を下へと投げ出す。

そしてカチカチのパンに勢い良く歯を立てた。

「……堅い」

堪らず咳き、一度それを口から離す。

これは少し食べるのに骨が折れそうだ。

小さくちぎる事もできず、何度も何度も噛み続けていると、唾液で
ふやけたおかげでやつと噛み切る事ができた。

味は……まあ、不味くはない。

だが決して、上手くもなかつた。

干し肉に期待することとしよう。

しかし、そちらも結局は同じように苦労する」ととなつた。

けれど、味に関して言えば現代人の口にも合ひ、美味しいものだつ
たので苦労したかいもあつたといつものだ。

「どうだ？ 美味いか？」

「はい」

返事をし、差し出された水を受け取ると直ぐに喉を潤す。

干し肉、パン、水、その三つを交互に口にし、俺は時間を掛けて全
てを完食した。

ほつそりとしていた幼いお腹が、少し膨れた気がした。

「あの、ローラーさん。また少し聞きたい事があるんですけど」

食後の休憩も兼ねて、昨夜の様に質問をしてみる事とする。
やつぱり情報を手に入れておく事はこの先も重要な事である。
それに、この陽気だとぼーっとしていれば、またすぐに寝てしまつ。
寝起きだというのに。

「なんだ？」

「私も答えていい事があるので、ローラーさんも答えたくなかった
から別にいいんですけれど……その、撻ですか？ ローラーさんがベン
トさんに言つていた撻つて言つのが何なのか、ちよつと気になりました
して……」

自分は情報を出さずに、相手に情報を催促する。

少し図々しくもあつたけれど、ローラーさんはそんなことを気にする
でもなく、あっさりと撻について話してくれた。

「実はあの村長の家には代々伝わる文献だかなんだかがあるらしく
てな。それにはバルタサークの魔術送りっていうもんについて書か
れてるらしいんだ」

「魔術送り？」

「ローラーさんむづくへつと頷く。

「で、魔術送りってのは村にどどまる魔術師の数を一人以上にはしてはいけないっていう内容なんだよ。一人以上になつたら、二人共村の外に送り出す。んでもつて、バルタサールってのはあの村長のご先祖様な。バルタサール・アルヴィドソン、村を作つたやつだ」

なるほど。

何だか難しい話だけれど、とにかくその辻のせいでコニーさんが村を出でいかなくてはいけなかつたってのはわかつた。
あれ？ でもそうすると、それは俺が魔法使いみたいな格好でうろついていたせいって事なんじゃないのか？
その考えに至り、どくんと心臓が脈を打つ。
しかし、直ぐにまた新たな疑問が生まれた。

「あの、でもアイナさんも魔法使い、魔術師ですよね？ それだったら私が来る前に、アイナさんとコニーさんが村を追い出されるんじゃ……？」

「ああ、しつかりとルールに則れば、そういう事になるな

ルールに則れば、強調されたその部分に疑問符が浮かぶ。

コニーさんは頭を搔き、渋い顔を浮かべながら説明を始めた。

「アイナはあの村長の娘だからな、追い出したくなかったんだろ。回復魔法使えるのをいいことに、村の奴らにも、わしの娘は魔術師じゃなくて治術師だー、とか訳わかんねえ事言つてたからな」

ああ、ベントさんが言つていたのはそういう事だったのか。

それにしてあるの村長、最初に会つた時は普通にいい人だと思つてたのに。

「あの村長さん、あまりそんな風には見えませんでしたけどね」

「まあ、あいつは娘を手元に置いておきたいのと同時に、俺を村から追い出したかったみたいだしな。お前を最初歓迎したのも、俺に面倒を見る様に頼んだのも、俺達一人まとめて追い出すためだつたんだろう」「ううう」

その説明にやつと胸のつつかえが取れた気がした。

大人の汚い部分を聞いてしまった以上、気分的にはプラマイゼロだけれど。

ふと顔を上げると、一ちらへと歩み寄るゴーさんが見えた。

「すまん、ガキにする話じゃなかつたな」

そう言つて、俺の頭を乱暴に撫でる。

聞いたのはこちらだというのに、何故か謝られてしまった。やはり見た目相応に子供扱いされているという訳か。

一つため息をつき、俺は馬車の奥へと入る。

「よし、そろそろ行くか」

ゴーさんが御者席に乗り込むと、馬車が軋み、音を立てる。穏やかな森にバートの嘶きがこだまし、車輪がゆっくりと回り始めた。

それからしばらぐ、何と単調な日々であつただろうか。時折ある刺激でさえも、心地良い娯楽ではなく、血生臭い光景だつた。

とはいってもあれから三日、魔物や道化師に出会いとは無く、現れるのは迷い込んで来た野生動物のみ。大人しく街道を進んでいたといふのに、結局のところ出会つてしまつたのだ。

何とも運のない事である。

そしてその野生動物、小さな猪はヨーちゃんの手によつて器用に捌かれ、今は肉片となつて幌の枠へと吊るされている。進むにつれ、ぶらぶらと揺れるそれを、俺は今日もまたぼーっと眺めている。

そう言えば、俺がこの世界に来て始めて見た狼、あれほどぞやら魔物であつたらしい。

特徴を伝えただけで、ヨーさんが直に見た訳ではないから確定ではないけれど、背筋のゾッとする話だ。

そしてもう一つ変わつた事といえば、夜中になるとヨーさんが馬車の外で何かをしているという事だ。

何か、といつても別に悪に手を染めてるとかそういうのじゃないんだろうけど、布越しに見える淡い光のせいで何度も安眠を妨げられてしまつてしているのだ。

その程度で怒つてゐるという訳ではないけれど、少し興味が沸く。魔法でも使つてゐるのだろうか、今度聞いてみるとしよう。

「おい、そろそろ着くぞ」

背後から声を掛けられ、馬車の前方へと振り返る。

隙間からヨニーさんの横へ顔を出すと、小さな村が見えた。

街では無く村。

そう、目的地では無くその中継地點のメラン村だ。

咄嗟の出発だったので、あまり持ち出せなかつた食糧などを補給するらしい。

ガラガラと車輪が音を立て、村の入り口へと近付いて行く。関所や門といったものは無く、簡易の柵の様なものが格子状に張られていた。

そしてその傍らには槍を持ち、革でできた簡素な防具を身に付けた村人が立っている。

決して敵意ある者ではないが、俺は無意識に本の影に身を潜めた。馬車が村人へと近付く。

こつそりと見遣るとその人は軽く会釈をしただけで、無言のまま俺達を迎えた。

「意外と簡単に入れるんですね」

再び前方へ顔を出し、率直な感想をぶつける。

ヨニーさんは傍らに飛び出た頭に軽く反応を示すと、直ぐに前を向き口を開いた。

「まあ、ああいうのは魔物対策に置いてあるだけだからな。ここいら辺なんて基本的に平和なものさ」

成る程、やつぱり魔物っていうのは普通の人々にとっては脅威なのだろう。

確かにあんなものが飛びかかってきたら、たまつたもんじやない。思い出しながら頭を搔くと、馬車はある一つの建物の横にゆっくりと停車した。

御者席から降りるローラーさんを見て、俺も取り敢えず馬車から降りる。中途半端な高さが少し膝に響きながらも、ぱんぱんとロープを呪いた。

この世界に来たばかりの時はまるで新品の様に純白であつたこの服も、たつたの三日でとこぶどうがくすんでしまっていた。

まあ、味が出たとでも思つておいつ。

その味わいを増した衣服から吐き出されて宙を舞う埃は、真横の建物へと流れしていく。

比較的頑丈そうな煉瓦の壁に、木材の屋根を被つた建築物。回り込んで見てみると、少しばかり横に長く伸びるその建物の扉近くには一つの看板が下がつていた。

まじまじと見つめるが、やはり字を読む事は出来ない。
まるでミミズが這つたようだ。

「宿屋って書いてあるんだよ」

声が聞こえた方を向くと、すらりと伸びる綺麗な茶の髪の毛が目に飛び込んできた。

それはうさぎの様に嬉しそうに飛び跳ねると、宙を舞う。
目線は俺と同等、にんまりと笑顔を浮かべる女の子が立つていた。小さくなってしまったのは自分であるのに、目の前の女の子が拡大されている様な、嫌な違和感を覚えた。

「あ、そなんだ……ありがと」

敬語を使うのも変なので、適当にお礼を言つておく。
こんな小さな子でさえ、緊張してしまつ俺は少し病氣か。
礼を言われ、嬉しそうにこりと笑つた少女に俺は苦笑いを返す。
子供はあまり得意ではないのだ、嫌いな訳じやないんだけど。
そんなおよそ似つかわしくない引きついた笑みを浮かべていると、
目の前の少女の頭に何者かのげんこつが食らわされた。

「あんただつて字が読める訳じやあないでしょーが」

振り下ろされた拳を辿り、その主の顔を見上げる。

俺達一人よりも少し大きい、気の強そうな女の子がそこにいた。

「もお、殴ることないでしょー！ お姉ちゃん！」

殴られた少女は頭を抑え、ぴょんぴょんと地面を跳ねる。
材質は麻か、可愛らしい刺繡の施されたスカートがふわりと広がつ
た。

「はーはー、『めんなさいね』

傍から見てもわかるような気のない返事をする姉と呼ばれた少女。
推察も何もあったもんじや無いけれど、恐らくこの二人は姉妹なの
であろう。

よく見てみれば、姉は背中のあたりで一つ結び、妹はストレートと違いはあれど、一際目を引く赤茶けた髪にそれから田元、とても良く似ている。

まあ良く似ているといえど、それは外見に関してだけ見たいだけれど。

妹の方は九歳ぐらいにして字も読めないみたい……ああ、でもそれはこの世界の識字率がそれほど高くないのかも。

と、そこまで考えて疑問が浮かぶ。

先程妹さんは看板の字が読めていたではないか。
そんな考え方から妹と看板を交互に見遣ると、その行動の意味に気付いたのか、お姉さんがある場所を指差した。

「ああ、なるほど……」

堪らず漏れる納得の声。

お姉さんが指差したのは看板に書かれた文字の少し上。分かつてしまえば簡単な事、そこにはベッドの中ですやすと眠る、猫と思しき謎生物が描かれていた。

ちょっとわかり難いけれど、この絵が宿屋の証なのだろう。
というかこの子達はこの村の人だから、元から知っていたのかもしれないけれど。

「ね？　ね？　すごいでしょ！　これ、私が描いたんだよ！」

ぴょんぴょんと可愛く飛び跳ねながら、小さな指で絵を指差す。
やっぱり歳相応の絵、あまり上手とは言えないけれど、別にそれをそのまま突きつける必要もないだろう。

そう適当に返事をしようとしたその時、後ろから聞こえてきたのは

「ユーモアの声だった。

「おー、上手こ上手い！ 僕、猫好きなんだよ。な？ ノーラ」

遠くを見るようなポーズで田の上に手を当て、おどけてみせるその姿に俺達三人の視線が注がれる。

な？ とか言わても知らないよ、そんな話。

「おじさん……だれ？」

「ん、おじさんま」こいつのパパだよパパ

何故か得意気なその姿を見て、俺は小さく溜息を吐いた。
まあア承をしてしまった以上、この設定はこの先絶対なのだろう。
もう気にする事もない。

「と、こう」とで君たち。おじさん達はひょつといの宿屋に用があるんでね、悪いけど失礼するよ

そう言って踵を返し、ドアを開けるユーモア。

宿屋に用ということはやはり、今晩はここに泊まるのである。物資を補給したら直ぐに出るのかと思っていたけれど、やつもいかないのだろうか。

彷徨う視線が姉妹を捉え、軽く頭を下げると俺はユーモアの背中へと続いた。

「じゃあ私達も帰らつか？　お姉ちゃん

背後から聞いた声と近づく足音。

そしてその音は俺の真横で、赤髪の少女へと変わった。にっこりと笑みを浮かべながら両手を後ろで組み、楽しそうに見つめてくる。

そう、先程まで話していたあの妹さんだ。

彼女は「帰る」と呟たはずで、俺とコニーさんが入ったのは宿屋、そして彼女達もその後に続いてきた。

ということは？

浮かんだ疑問はコニーさんに投げかけられた。

「ん？　お嬢ちゃんたちも宿に用なのがい？」

後から着いてきていた姉の方が、その質問に答える。

「用といつか……、ここ私達の家なので」

やつぱりそういうことだ。

看板の絵も妹さんが書いたと言っていたし、別に驚く事ではない。むしろ予想出来たであろうことだ。

しかし、一方のコニーさんは何故か少し驚いていたようだった。

「ん？　君達ここに住んでるの？　居候かなにかい？……いや、あいつがそんなことするわけないか」

何とも煮え切らない言葉に返事をしたのはやはり姉の方だった。

「いえ、母がやつてる宿ですか……」

問い合わせられる事に何か違和感を感じたのか、彼女の眉間に小さな
しわが寄る。

しかし、不審を抱いているのは彼女だけではなかつた。
一体何故、コニーさんはそこまでの疑問を露わにしているのだろう
か。

頭を捻つたところで答えが出るわけでもなく、コニーさんの行動を見守つていると、彼は怪訝そうな顔ですぐ正面の宿屋のカウンターへと詰め寄つた。

しかし俺達が入店しても誰も出て来なかつた事から分かる通り、そ
こに人影はない。

「あのー！　すこませーん！」

コニーさんがカウンターから身を乗り出し、声を上げる。
しかし奥にある部屋からの反応は無く、仕切りに使われている暖簾
が揺れる事もなかつた。

おかしい、そんな風な表情でコニーさんは首を捻る。
主人は留守なのか、そう問おうと姉妹の方へ首を回すと俺が聞くよ
りも早く、姉がコニーさんへと歩み寄つた。

「多分上にいると思つたんですけど……」

そう言ってカウンター脇にある木製の階段を指差す。
ぎしぎしと音が鳴るのが容易に想像できるよつた、そんな階段だ。

ありがと、と言ひいて「一ちゃんが段差へと足を掛けると、案の定使い古された木材がぎしづと悲鳴を上げる。

そしてその音と同時に、背後からも可愛らしい声が響いた。

「おじさん！ 用事がすむまで、ノーラ……ちゃん？ と遊んでてもいい？」

一度聞いただけで自信がなかつたのか、俺の名前を確認する様にそんな提案をする妹さん。

同年代という事で気に入られてしまつたのか。

「一ちゃんは少し悩むと、あまり遠くへ行かないといつ事を条件に許可を出してくれた。

少し悩んだのは恐らく、あの道化師のことについてだ。襲われた村から遠く離れたとはいえ、俺達の命を奪おうとした奴、この世のどいかに生きているとこう事だけでも不安になるのは当然だ。

むじむじここまで心配してくれていてのが、少し嬉しかつた。

「念の為だ、ここつを持つてけ」

「一ちゃんはそう言って俺の方へと近付き、何かを俺の首へと掛けれる。

そして踵を返すと、再び木材の悲鳴を響かせながら上階へと向かつて行つた。

そんな姿を見送り、首元にぶら下がるものを右手ですくい上げると、それは淡い青緑に煌く小さな石であつた。

一体何に使うものなのであらうか。

糸に通されたそれを捻ると光が反射し、一層の輝きを放つた。

「きれいだねえー」

あまり見た事のない美しさに無心になつていると、石を覗き込む様に妹さんが興味を示してきた。

俺は曖昧な返事をすると、それをロープの内側へとしまってこむ。なんだかとても大事なもの様なそんな気がしたから。妹さんは少し残念そうな顔を浮かべていた。

「で、あんたさつきは家に帰るつて言つてたんじゃなかつたっけ?」

少しばかりの気まずさを抱いた空氣を払拭する様に、お姉さんが妹へと呆れた視線を送る。

「いいじやん、べつに! 新しい友達なんだから!」

彼女のなかでは俺はもう友達である様だ。

ろくに友達を作れなかつた俺にとつてはその豪快さがどこか羨ましい。

しかし友達なのはまあいいとして、この一人の名前を聞いていないつてのははどうなんだろうか。

自己紹介よりも先に、友達。

小さい子つていうのはやっぱり純粋なのかもしれない。

「あの……一人の名前を聞いてもいいですかね?」

そんな問い合わせもちろん、と当然の如く答えると、一人は名前を教えてくれた。

「私はアーダ。よろしくね」

最初に自己紹介をしてくれたのはお姉さんの方、アーダさん。差し出された手を遠慮がちに握つてから思う、変に汗とかかいでいるだらうか。

元の俺と同じ年くらいの女の子だ、流石に緊張もする。しかし、アーダさんは特に気にした様子も無く、優しくにっこりと微笑んでくれた。

「じゃあ次は私ね！ 私はリブリー！ リブ、って呼んでね！」

握手の余韻に浸る間もなく、元気な声ではりきるのは妹さんの方、リブリー。

略すほど長い名前でもないけれど、それでもやつぱりリブのほうが呼びやすい。

本人の希望もある事だし、そう呼ばせてもらおう。

しかしこの子、決して悪い子じゃないんだけど、元気すぎるというか落ち着きがないといふか……、あまり俺の得意なタイプではないかもしねれない。

まあ、そういう好き嫌いが友達が出来ない原因だってのは自分でもわかっているんだけど。

「えっと、一人ともよろしく」

ちょびっとしみつたれた気持ちになりつつも、二人へと挨拶を返すとアーダさんが何やら含みのある笑みを浮かべた。

「さあ、ノーラちゃんも自己紹介をどうぞ。改めて、自分の口からね

どうやらこの言い方、結構引っ込み思案でシャイな少女と思われてしまつたのかかもしれない。

気を遣つてくれている感が随分と漂つてゐるし。

まあ、間違いではないというか九割くらい正解な訳だし、逆に都合がいいのかもしれない。

ここは俺を歓迎してくれた一人の好意に甘えておく、コーラーさんに

もあまり恥はかかせられないし。

俺は大袈裟に、ゆっくりと息を吸つた。

「私はノーラ・プラントです」

コーラーさんの苗字を、そして自分以外の苗字を名乗るのはなんとも氣恥ずかしくて、くすぐったかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4533m/>

空白の魔法

2011年9月4日23時17分発行